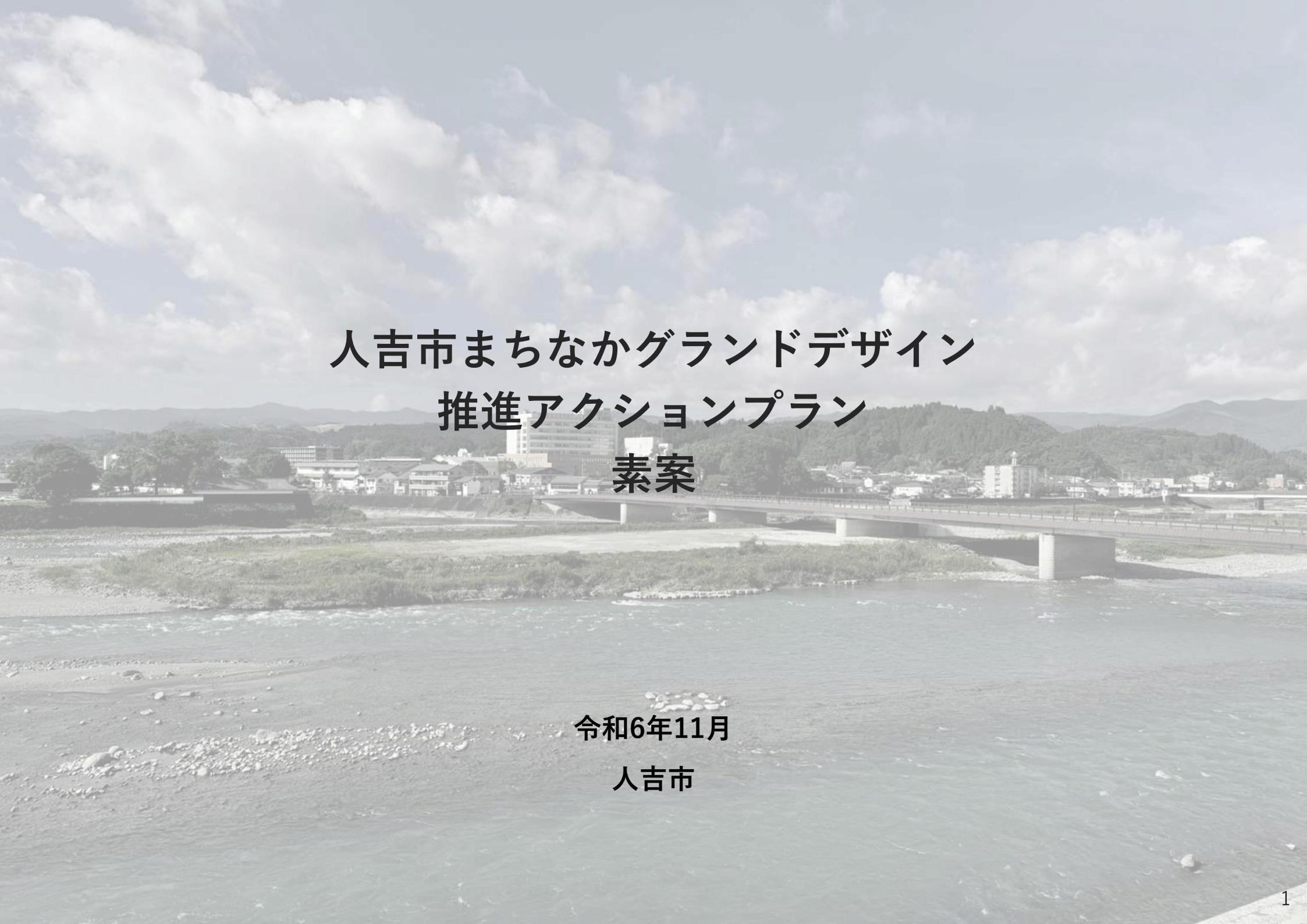




人吉市まちなかグランドデザイン 推進アクションプラン 素案

令和6年11月

人吉市

[目次]

P3-

第1章 アクションプラン策定の背景と目的

- (1) アクションプランの位置づけ
- (2) 市民の生活満足度向上と観光地魅力向上のサイクル
- (3) アクションプランのつくり方
- (4) 市民・事業者との対話

P9-

第2章 アクションプランの考え方

- (1) 人口減少を見据えた復興まちづくり
- (2) 目標・方針・指標
- (3) 推進体制
- (4) 社会実験の活用・段階的な進め方
- (5) 目標スケジュール

P17-

第3章 エリアの回遊の楽しみ方

- (1) エリアを巡るストーリー
- (2) エリアの楽しみ方・過ごし方

P21-

第4章 生活復興・観光まちづくりの推進方策

(1) エリア全体の推進方策

- ①プロジェクトとそれを支えるハードと仕組み
- ②回遊動線と10の拠点エリア
- ③ランドスケープ
- ④夜間景観
- ⑤交通・駐車場・モビリティ
- ⑥人吉まちなかランドバンク
- ⑦情報発信
- ⑧その他公共空間活用・維持管理・スキーム
- ⑨今後の課題
 - ・景観ガイドライン
 - ・サイン
 - ・持続する観光地経営

(2) 拠点エリアでのアイディア

(→これから個別のTFで具体的に進めていく)

- ①青井阿蘇神社＋球磨川
- ②中川原公園＋大橋
- ③胸川
- ④交流・文化の場（うぐいす温泉周辺）
- ⑤山田川・区画整理（紺屋町）
- ⑥鍛冶屋町通り
- ⑦人吉駅前＋SL
- ⑧城見庭園＋HASSENBA
- ⑨人吉城跡周辺
- ⑩新町

第1章

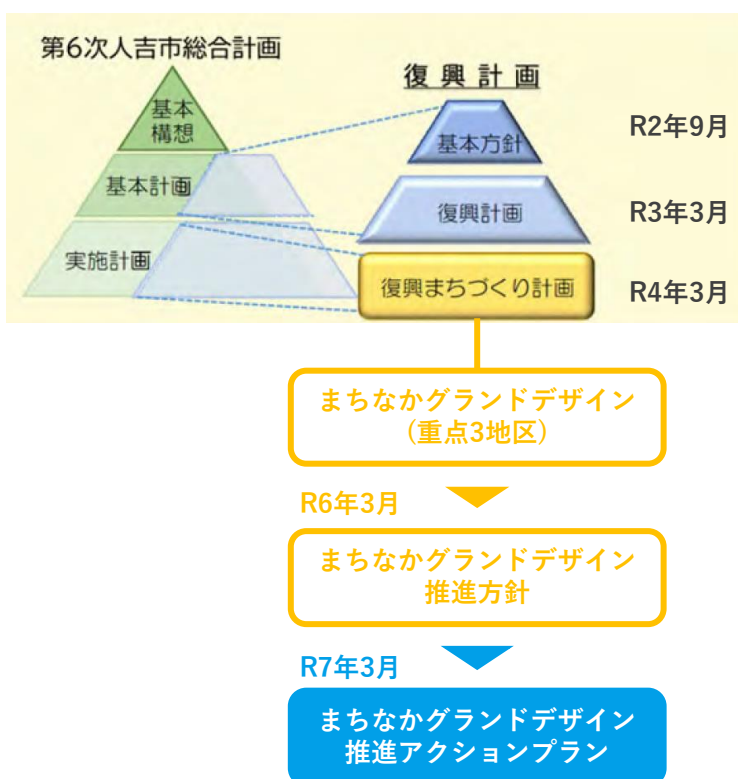
アクションプラン策定の背景と目的

「まちなかグランドデザイン推進方針」を具現化するための行動指針

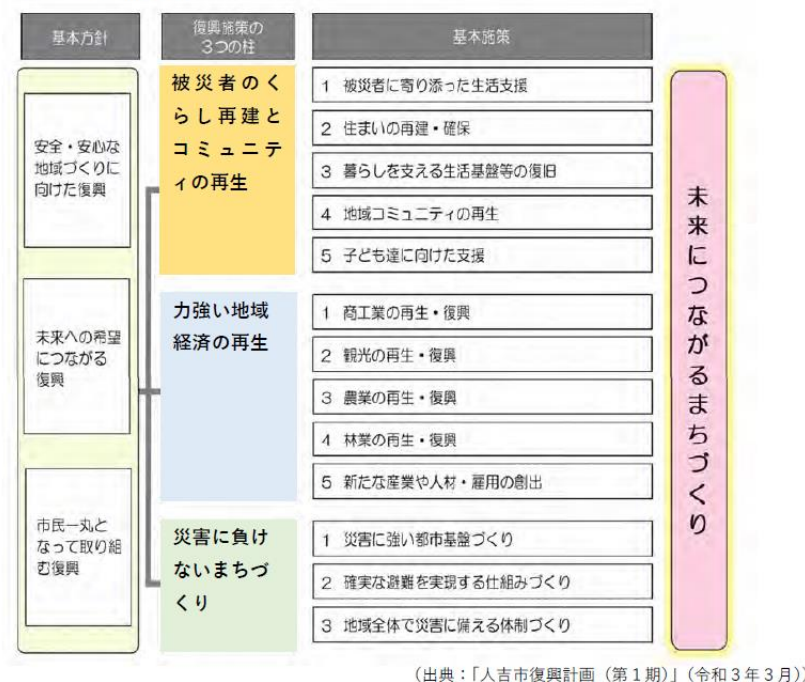
これまでの復興まちづくりは主に行政によるハード整備・復旧事業中心の計画づくりが進められてきた。「まちなかグランドデザイン推進方針」(R6年3月策定)で描かれる将来像の実現に向けては、これまでの計画を基に、ハード整備後の運営主体・方法・財源等を想定しながら、民間投資と連動したハード整備と事業化を目指すフェーズに移行する必要がある。

本アクションプランは、行政・民間・専門家のアイディアを重ね合わせた“ワクワクする将来の暮らしのアイディア集”であり、「まちなかグランドデザイン推進方針」を具現化するための行動指針である。

【アクションプランの位置づけと役割】

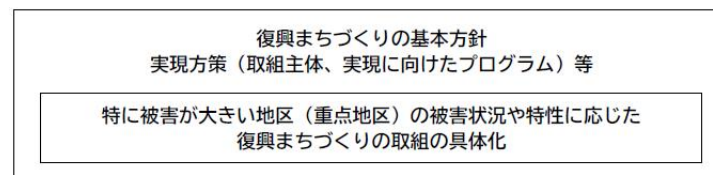


【復興計画における施策体系】



方針の反映及び施策の具体化

【復興まちづくり計画】



まちなかグランドデザイン (重点3地区)

特に被害の大きかった「まちなか」3地区にて、地区を横断したまちづくりのために策定

R6年3月

まちなかグランドデザイン推進方針

グランドデザインで定められた方針を早期に具現化し、スピード感のある取組が推進できるよう、「まちなか」が目指す将来像とプロジェクトをわかりやすく更新・明示し、市民、関係者間で共有するもの

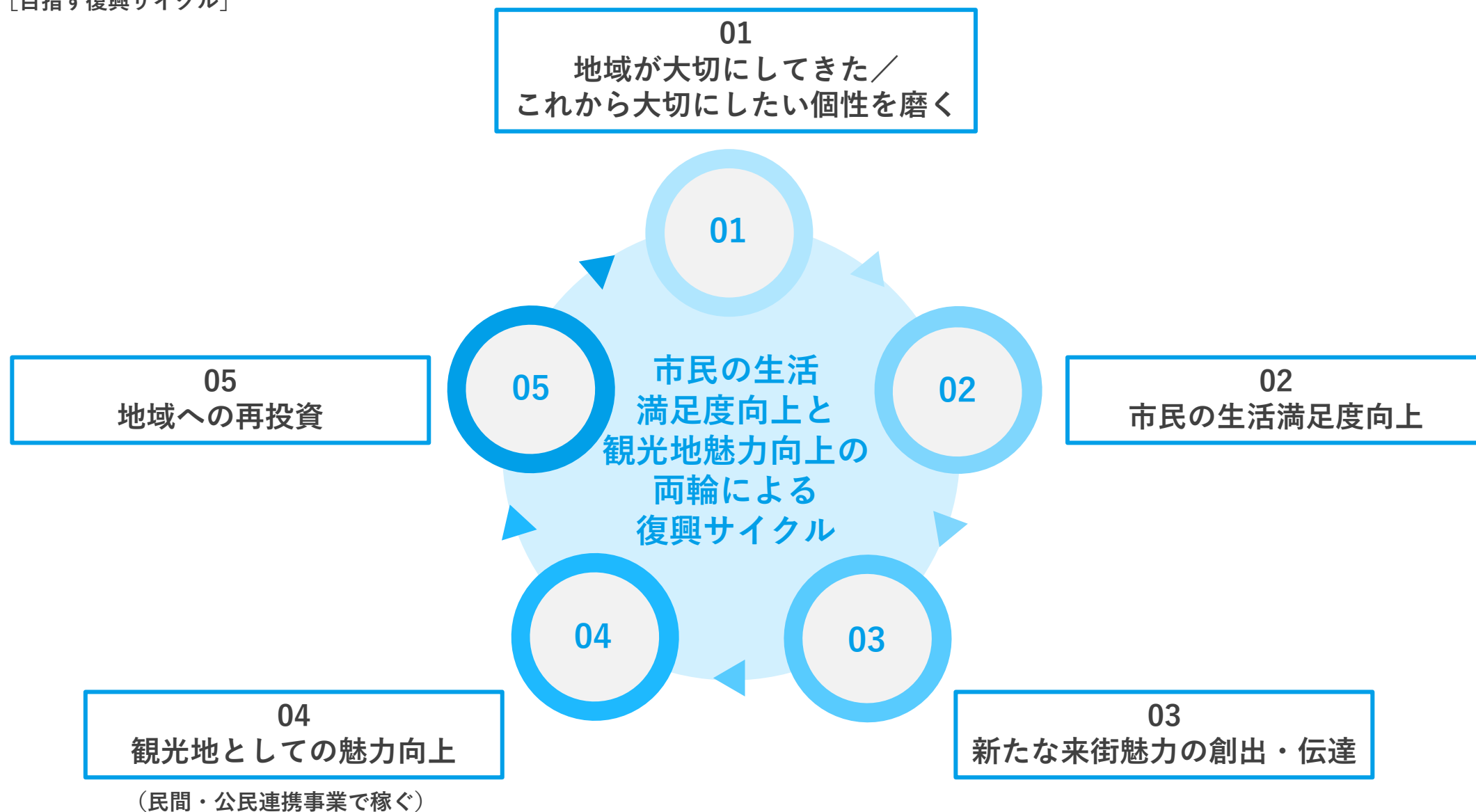
R7年3月

まちなかグランドデザイン推進アクションプラン

グランドデザインで定められた方針に、市民・専門家の思いやアイディアを重ね、具現化していくための具体的なアクションプラン(行動指針)

アクションプランが目指すのは、**第一に市民の生活満足度向上**である。地域が大切にしてきた／これから大切にしたい個性を磨くことで、日々の暮らしがより豊かになる。その豊かな暮らしは来街者にとって魅力的に映り、人吉に行ってみたいという動機につながる。その魅力が広く伝わることで、観光地としても魅力が高まり、何度でも通いたくなるまちとなる。それによりまちで稼ぎ、地域に再投資することで、個性がより磨かれていく。**市民の生活満足度向上と観光地魅力向上の両輪による復興サイクル**を目指していく。

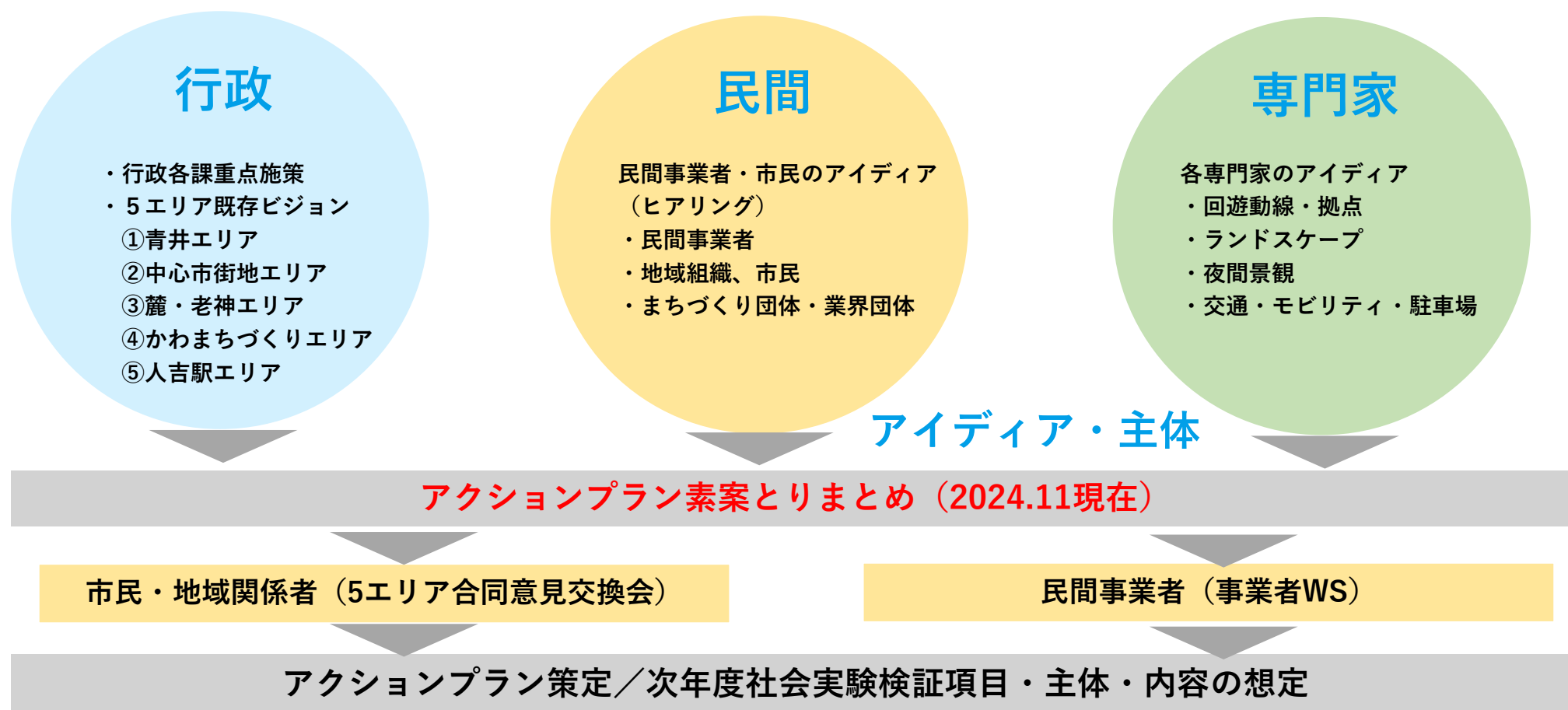
[目指す復興サイクル]



民間事業者・市民、専門家、行政のアイデアを重ね合わせる／更新前提のプラン

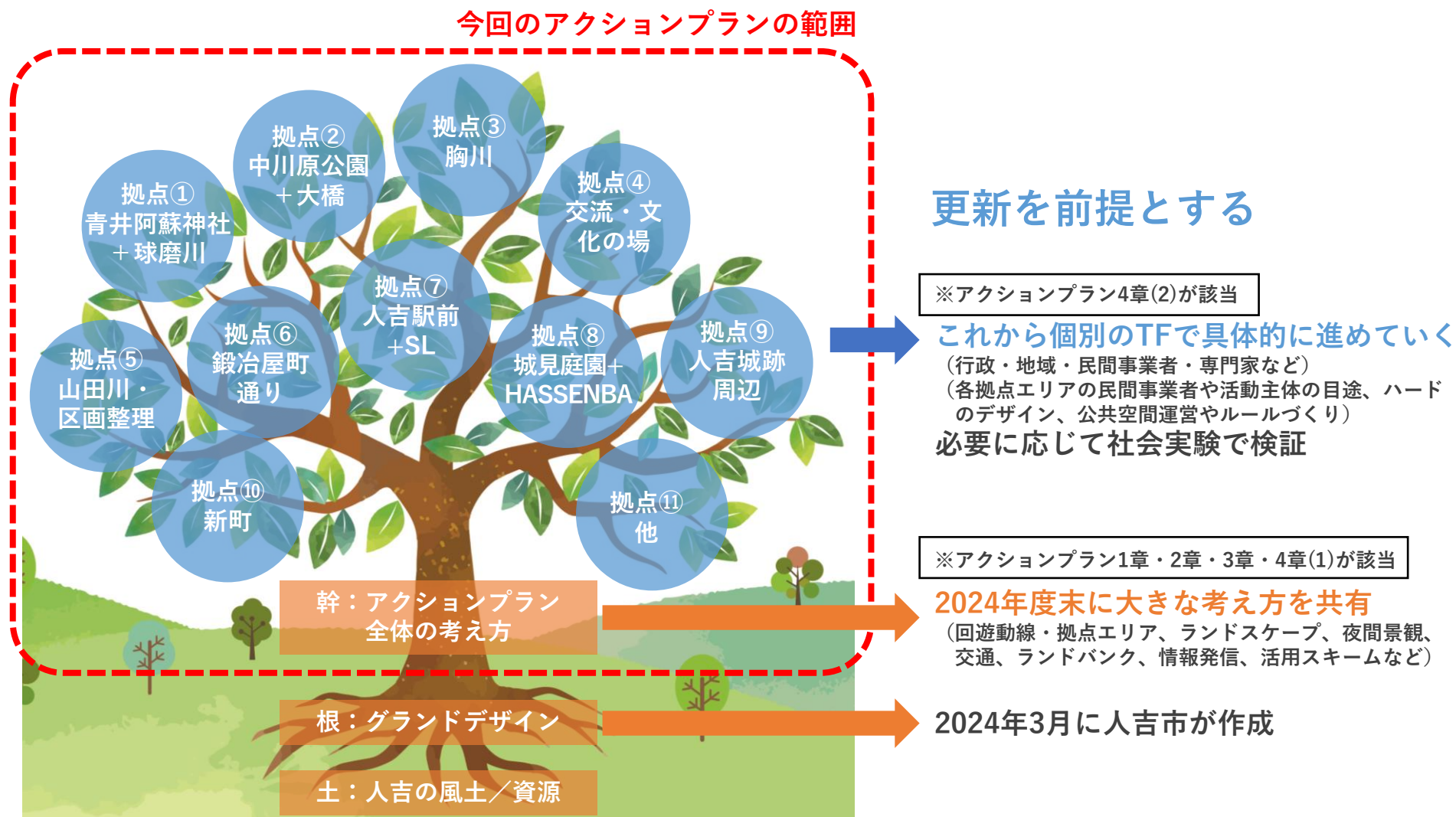
まず、まちなかランドデザインに描かれている行政のビジョンに、民間事業者・市民、専門家のアイデアや想いを重ね合わせ「アクションプラン素案」を策定する。その後、それをたたき台として市民や地域関係者、民間事業者との対話を重ねて「アクションプラン」をとりまとめる。

これまで協議会が組織化されていた青井エリア、中心市街地エリア、かわまちづくりエリアに加え、ランドデザインで位置付けられている麓・老神エリア、人吉駅エリアを含む5エリアに加え、既存の活動がされてきたエリアや全体の中で重要と思われるエリアを対象に、アイデアを重ねていく。



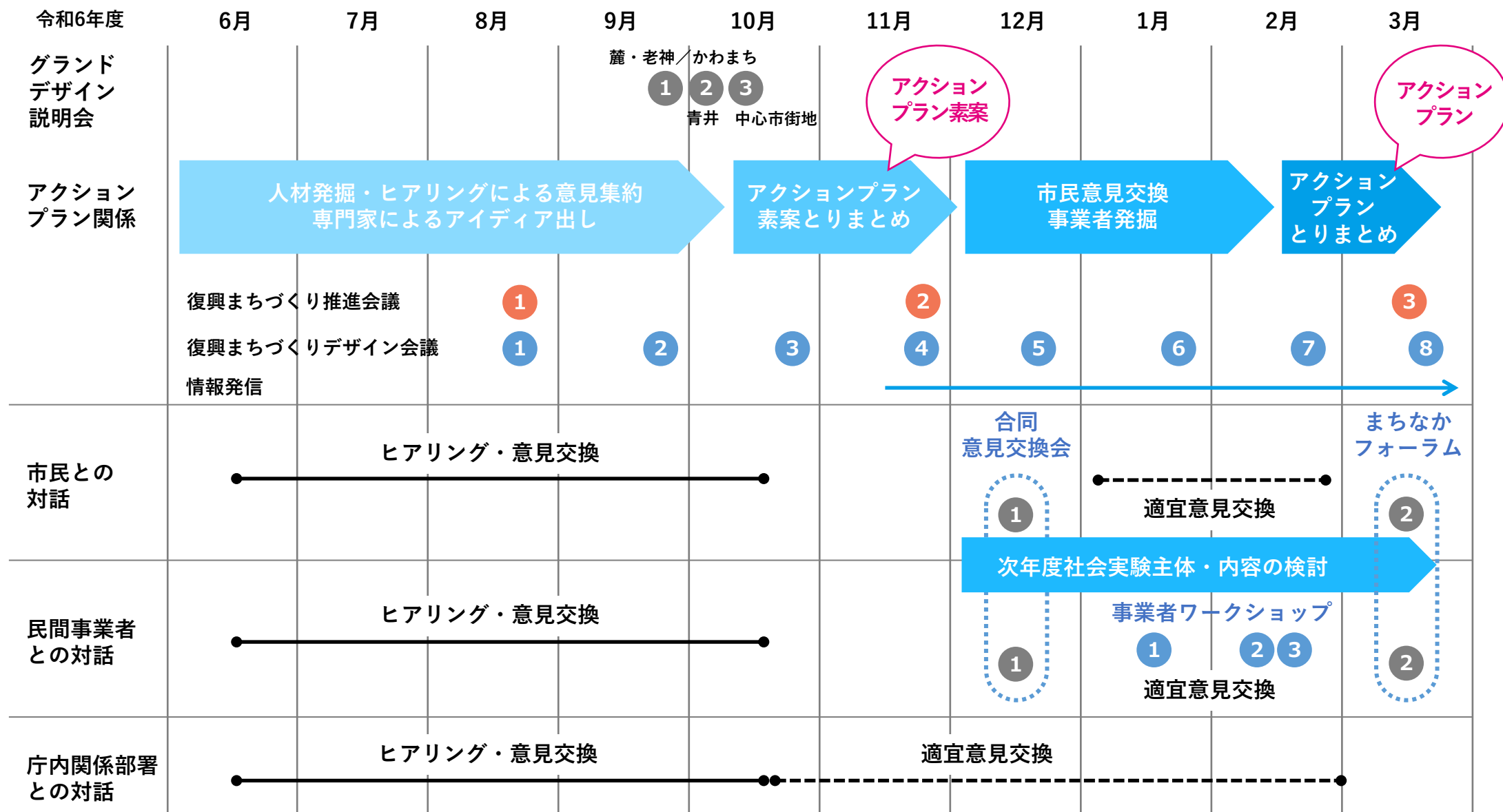
民間事業者・市民、専門家、行政のアイデアを重ね合わせる／更新前提のプラン

「アクションプラン素案」や「アクションプラン」は更新を前提とする。なぜなら、行政のみで実現できる計画ではなく、将来事業や運営を担う主体となる民間事業者・市民が大切であり、また行政の財源によっても実現性は変わる。そのため、アクションプランの内容は更新が前提で、実現が保証されたものではなく、また、現時点で掲載されていない内容・エリア・テーマ等についても主体や事業・活動の内容が具体化してくれば追加していくものとする。



対話を積み重ねてともに作り上げる

まずヒアリングや意見交換を基に**令和6年11月にアクションプラン素案**をとりまとめる。その後、それをたたき台として、5エリア全体での市民・地域関係者や協議会メンバーとの意見交換、今後事業参画を検討している民間事業者とのワークショップを実施し、それぞれのアイデアを重ね合わせることで、**令和7年3月にアクションプラン**をとりまとめる。



第2章

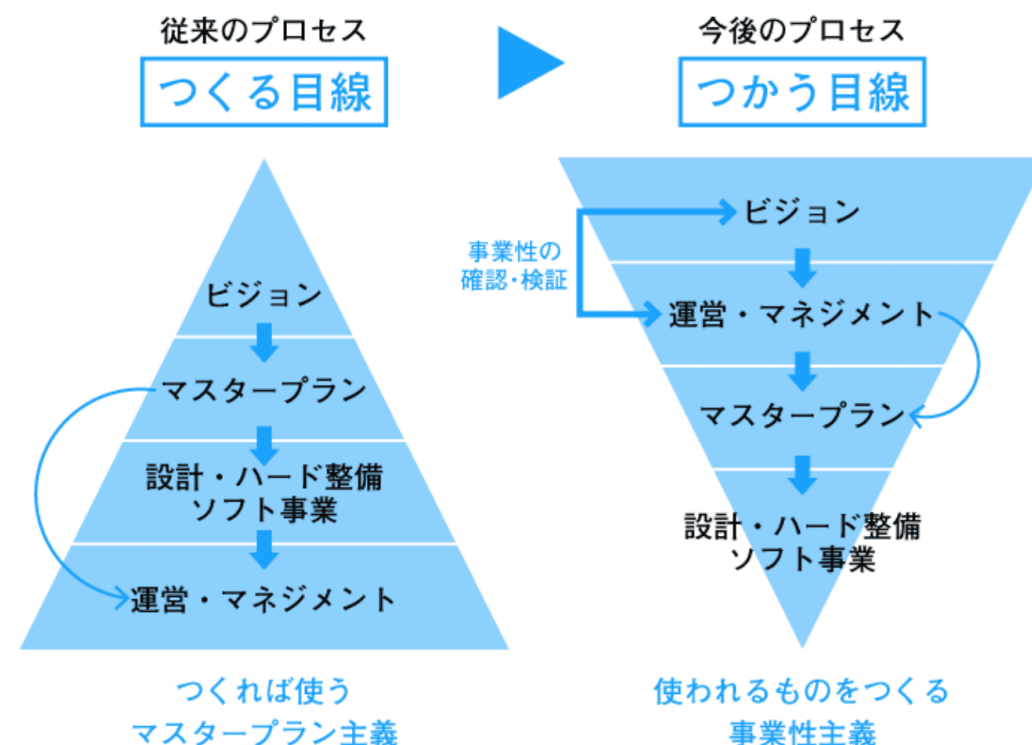
アクションプランの考え方

新たなプロセス「つかう目線」を先行させる

従来の拡大時代のまちづくり・開発のプロセスは、「つくる」側の行政や開発者がビジョン、マスタープランを描き、それに基づく事業が実施され、モノができたあとに運営者に引き継ぐ形が主流である。これは、プロセスがぶつ切りとなり、最後を担う運営者には当初のビジョンが継承されにくい、ハードができたら使う人がいた時代だからこそ、成立した手法であった。しかし時を経て、現在となっては、使われない、管理不能な施設や場所が増える結果となっている。

エリア価値を将来にわたり創造していくためには、「つかう」側の運営主体の役割が重要である。その主体候補がビジョンづくりや社会実験の検証に関わることで、官民でビジョンの共有ができ、ニーズに合い、事業的にも持続可能なものについて、実現に移行することが可能となる。

地元主体や専門家がプロジェクト開始当初から参画し、アクションプランのアイディア出しや社会実験を協働することにより、空間デザインや運営・制度設計などの分野横断ができ、「つかう」側の運営主体や市民・事業者の参画をより進めていくことができる。



事業化のステップ

事業化のステップとしては、下記①～③を想定している。

- ① 5 エリアの既存ビジョンを統合し、ワクワクする将来の暮らしのアイディア集としてアクションプランを取りまとめる
- ② 市民・事業者らとの将来像の共有、事業者候補の発掘、社会実験等を経て、将来的な運営主体となる民間事業者とチームを組み、事業者の想いと呼応するようなハード整備（公共投資）デザインへ反映する
- ③ ハード整備後の観光地経営を当初から想定し、枠組み・人材・財源を確保する

「人口減少への対応」と「エリア魅力向上」を両立する仕組みづくり

人口減少や空き地の増加は以前より進んでおり、令和2年の水害によりそれらの課題が加速したと言える。今後さらに人口減少が進み、水害により更地となった空き地や駐車場の土地利用が全て従前のように戻らないという前提にたつと、今回の復興まちづくりにおいては「人口減少への対応」と「エリア魅力向上」を両立する仕組みづくりが必要となる。

その仕組みとして、未利用地の所有(ストック)→利用(フロー)への転換、点在する未利用地暫定活用をセットで実践することが重要と考えられる。

<現状課題>

- ・未利用地の放置／今後も活用されない可能性
- 周辺住宅・商業・観光などの環境に悪影響
- ・過去の災害復興の教訓を活かす
- 原形復旧でなく将来需要適応型へ
- 生業・経済復興が大切
- 「つくる」先行でなく「つかう」視点で公民で投資



<目指す将来像>

- ・所有(ストック)→利用(フロー)への転換
- ・点在する未利用地の活用、駐車場や緑地の集約化、隣接地一体活用など

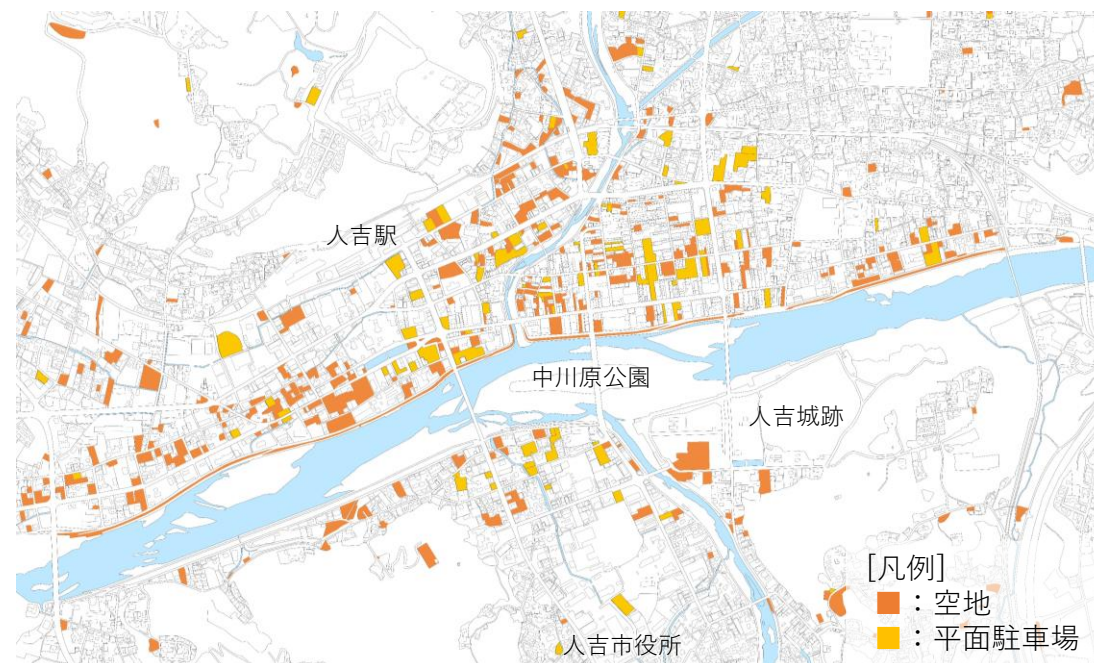
未利用地の「ストック→フロー化」

エリア魅力創出に活用する仕組み

未利用地の流動化
官民による推進の枠組み



暫定活用
(滞留空間・暫定店舗・農地・グリーンインフラ等)



まちなかに点在する空き地 (R5年時点)

市民の生活満足度向上と観光地魅力向上の両輪による復興サイクルを生み出すための目標・方針・指標を下記のように設定する。
指標の計測方法は今後検討する。



目標

方針

指標

	[1] 清流球磨川との関わり方が充実している	[2] 市民の生活文化がより上質・豊かになる (歴史文化・温泉・街並み景観・拠点・活動・焼酎・食等)	[3] 狭域・広域から誘客する選ばれる観光地になる	[4] 市民が復興まちづくりに共感し参加する
方針	①回遊性の高い河畔フットパス ②中川原公園を滞在・回遊のハブに ③絵になる川沿いの風景を維持し磨く ④アクティビティの充実(季節・時間帯・祭礼時など)	①主要回遊動線の高質化・街並み形成 ②主要拠点エリアの官民連携による事業化 ③空き地の質の向上、流動化の仕組み導入 ④幅広い年代・属性の市民のサードプレイス ⑤地域資源に触れる機会の創出	①地域ブランド再構築を意識した情報発信 ②巡りたくなるアクセスやモビリティ ③絵になる風景の創出 ④文化体験コンテンツの拡充と情報発信の連動 ⑤持続する観光地経営	①市民が復興まちづくりの情報を得られるきっかけと仕組みづくり ②既存市内メディアの連携、市民の発信参加の促進 ③10代の若者の参画機会の創出
指標	①川沿いの遊歩道・中川原公園の利用者数 ②川沿いの遊歩道・中川原公園の利用者層の多様性 ③川沿いの遊歩道・中川原公園におけるアクティビティの種類	①既存事業・活動の充実を含む、新規ビジネスやサービスの数・質 ②市民の愛着醸成・関わり方の多様性カウント	①観光客数・滞在時間・消費額の拡大・RevPARなど ②ブランドとターゲットに応じたメディアへの露出 ③魅力ある観光地選択の判断基準となる各種観光ランキング等への登場	①既存メディアやまちの発信プレイヤーが集う「復興まちづくり情報室」の設置と継続 ②事業者や市民、観光客参加型の人吉らしい発信スタイルの盛り上がり ③復興まちづくり事業で生まれた施設・場所における市民発意の取組数

民間事業者・専門家・行政等によるデザイン会議が、各拠点エリアを中心に具体的な将来像や事業化検討等を行うタスクフォースと連携して具体策を検討し、意思決定組織である推進会議へ提案を行う体制である。

復興まちづくり推進会議

人吉のエリア価値向上に向けた
公・民の取組に関する
最終意思決定機関

会長
人吉市長

有識者

地域
町内会

防災
消防団

商工
商工会議所

観光
温泉観光協会

歴史文化
文化財
保護委員会

教育
PTA

青年層
青年会議所

福祉
社協

行政機関
熊本県

行政機関
国交省

復興まちづくりデザイン会議

公・民の実施する事業のクオリティ
コントロール、継続的なエリア
マネジメントに向けた具体策の提案

座長
有識者

プロジェクトマネージャー
行政

地域経営
地域

事業者
強い想いと実行力を持つ者

金融
金融

専門家
事業組成

公民連携
公民連携

情報発信
情報発信

ランドスケープ照明
ランドスケープ照明

交通
交通

行政機関
行政担当者

方針提案
事業者活用アイデア

コーディネート

タスクフォース

TF①
交流・文化の場
(うぐいす温泉周辺)

TF②
区画整理(紺屋町)
山田川

TF③
青井阿蘇
神社周辺

TF④
中川原公園
胸川

TF⑤
球磨川
アクティビティ

TF⑥
城見庭園

新規
TF

新規
TF

TF⑦
駅前・SL

TF⑧
城跡・新町

TF⑨
街路・公園・
河川沿い等
回遊・デザイン

TF⑩
交通・モビリティ
・駐車場・道路
空間再編

TF⑪
情報発信

TF⑫
ランドバンク

新規
TF

新規
TF

事業者・市民活用アイデア

コーディネート

市民・事業者

必要に応じてTFに加わる

民間事業者

民間事業者

民間事業者

市民

市民

市民

合同意見交換会／事業者WS／社会実験等

まちづくり協議会

青井
復興まちづくり推進協議会

中心市街地
復興まちづくり推進協議会

※かわまち協議会は推進会議に役割を統合し発展的解消、かわまち
実行委員会は実行組織として継続。

協議
合意形成

ステークホルダー

地権者

自治会

漁協

関係団体等

協議
合意形成

管理者

河川管理者
(国・県)

道路管理者
(県・市)

許認可

協議
許認可申請

中川原公園・河川沿いの社会実験のプロセス(案)

復旧期

2024

- 豪雨被害により立入禁止 →最低限の災害復旧工事の実施
- 将来イメージが持ちにくい →かわまちづくり計画&アクションプラン素案をたたき台にして議論
- 使い方や担い手が不明 →次年度社会実験の担い手・アイデアを募る

社会実験期
(仮説の構築)**2025**

- 河川を使う人がいない →手を挙げた担い手が使いこなしている状況をつくる
- どんな使い方・景色ができるかわからない →日常時&非日常時の楽しみ方を試す
- 回遊のイメージがわからない →回遊のハブとして様々な過ごし方を感じられる状況に

2026

- 利用ルールがわかりにくい、コンセンサスがとれていない →河川利用ルールを作成
- どのようなハードが求められているのかわからない →検証結果より提案
- 目指すべき将来像が定まっていない →中川原公園周辺エリアビジョンのとりまとめ

実践期
(運営・ハード実現化)**2027**

- 持続する運営体制の構築 →運営準備組織の組成・運営、河川利用ルールの改善
- 利活用に必要なハードの設計

2028

- 運営組織の位置づけ（官民役割分担／公募など）
- ハード整備

自立
運営期**将来**

- 中川原公園&対岸（河川＋公園＋道路）における民間運営の仕組みの自走

○社会実験の目的

- ・社会実験は、主体となる事業者をイメージし、以下を目的として実施することが重要である。

①事業性の検証	検証項目（仮説）を設定し、常設化・定常化に向けて運営面・収支面などの事業性を判断する。
②ハード整備内容の検証	ハード整備を伴う事業については、社会実験での活用結果を踏まえて、民間の活用主体の意見を取り入れながら各種設計に反映する。
③コンセンサス醸成	ビジョンで描いたシーンを実際にかたちにして共通体験を得ることで、エリア内外の人たちに共感してもらい、ビジョン実現へのコンセンサス醸成に繋げていく。
④最適な制度設計の検討	既存の各種法制度やルールでは突破できない壁について、実験と検証を通じてより望ましいルールの在り方を提案する。
⑤運営体制・ルールの試行	公共空間の運営や安全確保のためのタイムラインなどの運営主体やルールを検証する。

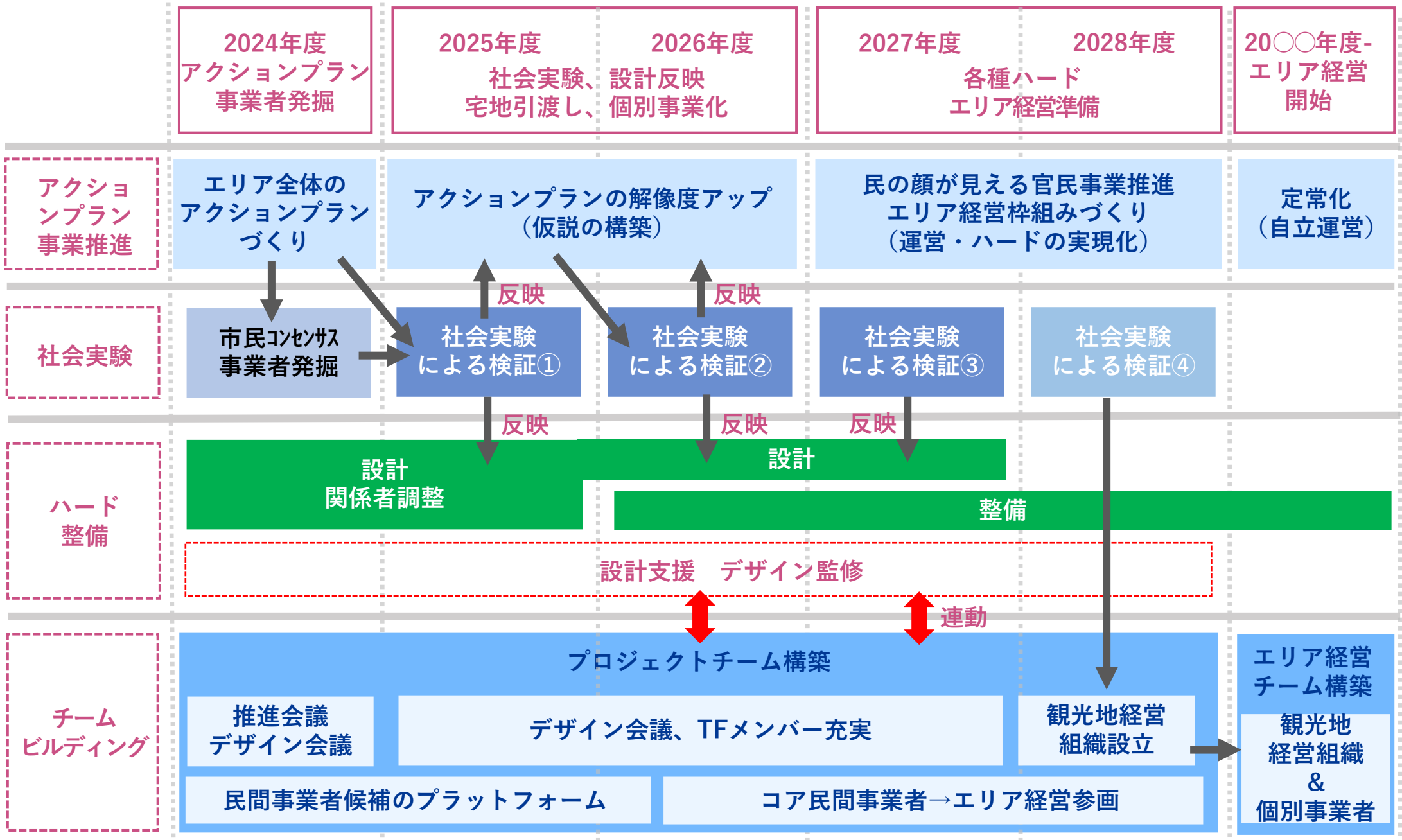
○検証方法

a：滞留行動調査 滞留行動の種類、滞留の姿勢、1人あたりの滞留時間、性別、年齢等の項目を調査し、分析を行う。	b：利用者アンケート調査 利用者の満足度や意向についてアンケート及びヒアリングを行う。
c：事業者／出店者ヒアリング調査 運営や収益などに関するヒアリングを行い、改善点を把握し対応を検討する。	d：地域住民ヒアリング調査 各社会実験に関して良かった点や懸念点などをヒアリングする。

○社会実験の実施を想定するエリア・テーマ

青井阿蘇神社 + 球磨川	中川原公園 + 大橋	胸川
交流・文化の場 (うぐいす温泉周辺)	山田川 区画整理	鍛冶屋町通り
人吉駅前 + SL	城見庭園 + HASSENBA	人吉城跡 周辺
新町	エリア・テーマ	エリア・テーマ
エリア・テーマ	エリア・テーマ	エリア・テーマ

復興まちづくりの全体スケジュールとして、まずは“ワクワクする将来の暮らしのアイディア集”としてのアクションプランを2024年度にとりまとめ、2025年度からその暮らしのイメージとハード整備後の運営主体・方法・財源等を想定しながら社会実験を進め、民間投資・活動と連動したハード整備と事業化を目指していく。



第3章

エリアの回遊の楽しみ方

清流球磨川の恵み、まちの資源を巡る

歴史のストーリー、 原風景

秘境 地形

隠れ里、独自の個性
山に囲まれ急流に遮られた場所
行き止まり文化

青井阿蘇 神社

国宝
おくち祭、球磨神楽
保守と進取

人吉城 城下町

球磨川・胸川に向く川城
城と城下町をつなぐ中川原
職人町(鍛冶屋町大工町紺屋町)
市が立つまち

相良家 治政

日本遺産に認定された
相良700年の歴史

神・仏

人吉球磨に点在する社寺・仏像
既存社寺を壊さず遺した
身近にある重要文化財

ウンスン カルタ

全国でも人吉球磨
だけに残る
保存と普及の活動

様々な生業・産業 との結びつき

林業

かつての基幹産業
多良木という地名
きじ馬の物語
スマート林業

農業

灌漑により農地確保
百太郎溝・幸野溝
米、たばこ、茶、栗、
玉緑茶日本一の産地

球磨 焼酎

灌漑→豊富な米
→貴重な米の醸造を許可
世界有数の集積度、産地指定

水上 アクティ ビティ

1665年 球磨川開削→八代へ
1910年 球磨川下り開始
ラフティング等川に浮かぶ

人吉 温泉

約50の泉源
湖底層(人吉層)
マイ温泉文化

繁華街

球磨エリアの中心
飲食店密度日本一

流域上下流の 森やまちとのつながり

森

原生林
市房山
森林セラピー

川辺川

流域
18年連続水質日本一

10市町村

人吉盆地一体
相良家

生物

多様な生態系
尺アユ
ゴイツバメシジミ(市房山)
ヤマセミ・カワセミ

肥薩線 くま鉄

人吉球磨をつなぐ
車窓には球磨川
鉄道ファンの名所

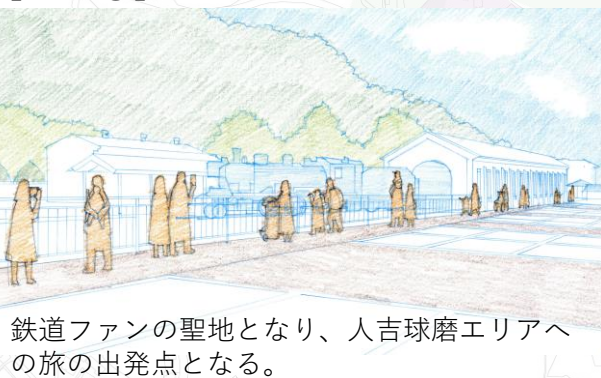
人吉ゆかり のアニメ

人吉球磨を一体にとらえた
何でもない原風景

10の拠点で生まれるシーンイメージ

今回の復興まちづくりでは、清流球磨川の恵みやまちの資源を巡り体感できる10の拠点を定め、以下のような豊かなシーンを生み出していく。

[拠点⑦]人吉駅前+SL



[拠点⑤]山田川・区画整理(紺屋町)



[拠点④]交流・文化の場(うぐいす温泉周辺)



[拠点⑥]鍛冶屋町通り



[凡例]

○ : 拠点	歴史資源
○ : 主要な回遊動線	観光資源
— : 川上の歩行者ネットワーク	酒蔵・醸造所
— : 川下の歩行者ネットワーク	旅館
○ : メインの車両ネットワーク	その他宿泊施設
— : 既存上下動線	公衆浴場
— : 新規上下動線	コミュニティ施設
□ : 既存駐車場	駐車場
	飲食店
	小売店
	公園

[拠点①]青井阿蘇神社+球磨川



[拠点⑧]城見庭園+HASSENBA



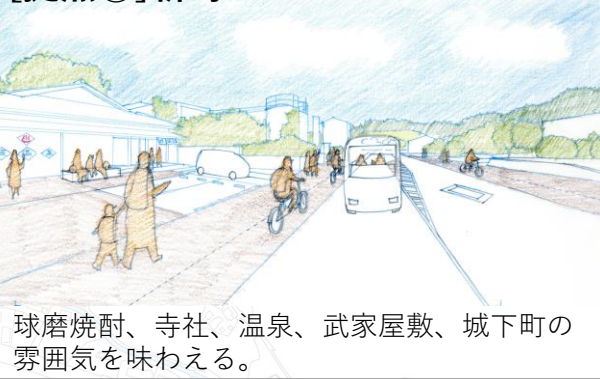
[拠点⑨]人吉城跡周辺



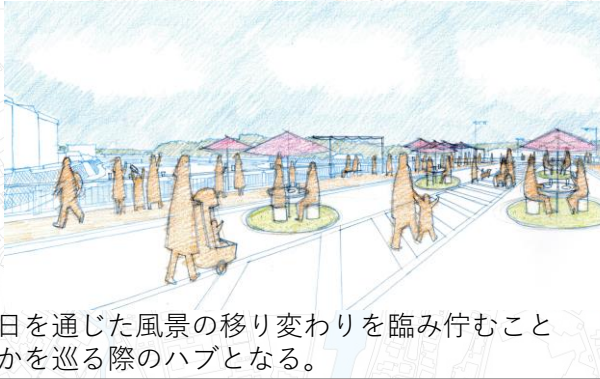
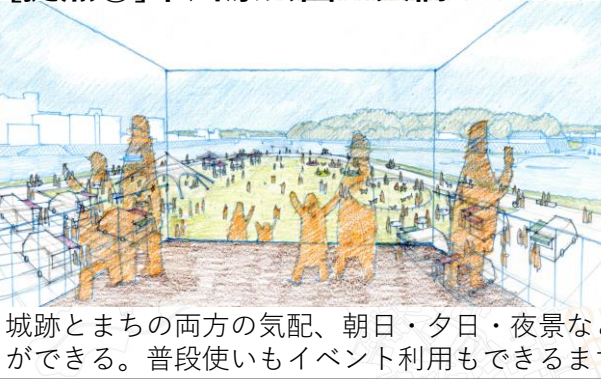
[拠点③]胸川



[拠点⑩]新町

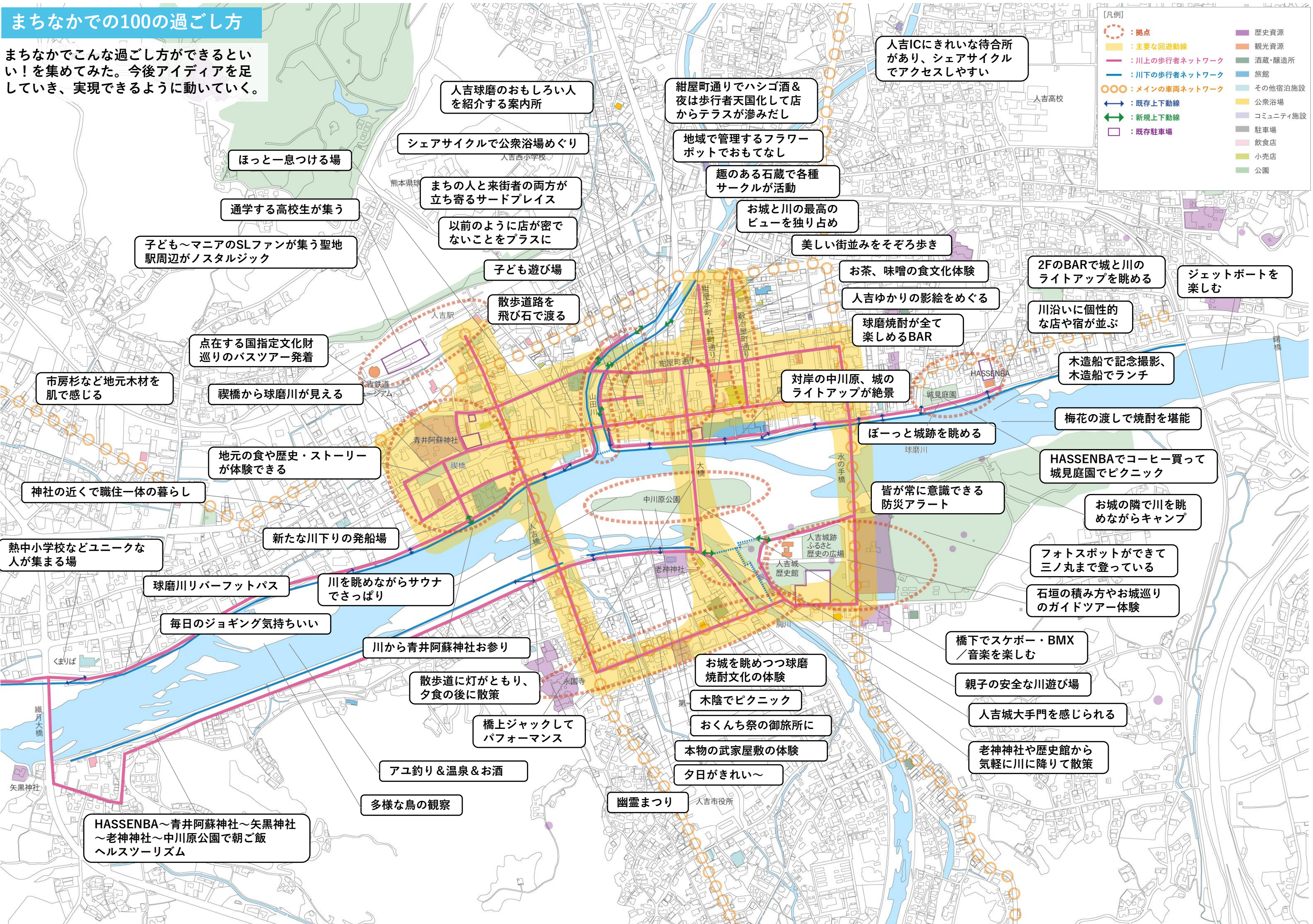


[拠点②]中川原公園+大橋



まちなかでの100の過ごし方

まちなかでこんな過ごし方ができるといい！を集めてみた。今後アイデアを足していき、実現できるように動いていく。



第4章

生活復興・観光まちづくりの推進方策

エリア全体のハード整備と仕組みづくりによる持続的なプロジェクト組成

民間事業者主体のプロジェクト、それらのプロジェクトをエリア全体で支えるハードと仕組みの構築により、地域の本質的な価値を生み出していく。プロジェクトは、まず10の拠点プロジェクトを立ち上げて推進していくが、市民・民間事業者との対話を通じて新規のエリア・テーマによるプロジェクトも随時追加していく。

■地域の本質的な価値

- ・価値創造、目標達成

■プロジェクト（エリア・テーマ）

- ・民間主体・民間投資の各エリアでの個々の事業
- ・大小さまざまな規模の事業を織り交ぜていく

■エリア全体共通のハードと仕組み

- ・プロジェクトを実現・持続させるためのエリア全体での取組み

市民の生活満足度向上と観光地魅力向上

[10の拠点プロジェクト(既存エリア)]

青井阿蘇神社
+ 球磨川

中川原公園
+ 大橋

胸川

交流・文化の場
(うぐいす温泉周辺)

山田川
区画整理

鍛冶屋町通り

人吉駅前
+ SL

城見庭園
+ HASSENBA

人吉城跡
周辺

新町

[新規エリア・テーマプロジェクト]

エリア・テーマ

エリア・テーマ

エリア・テーマ

エリア・テーマ

エリア・テーマ

ランドスケープ

夜間景観

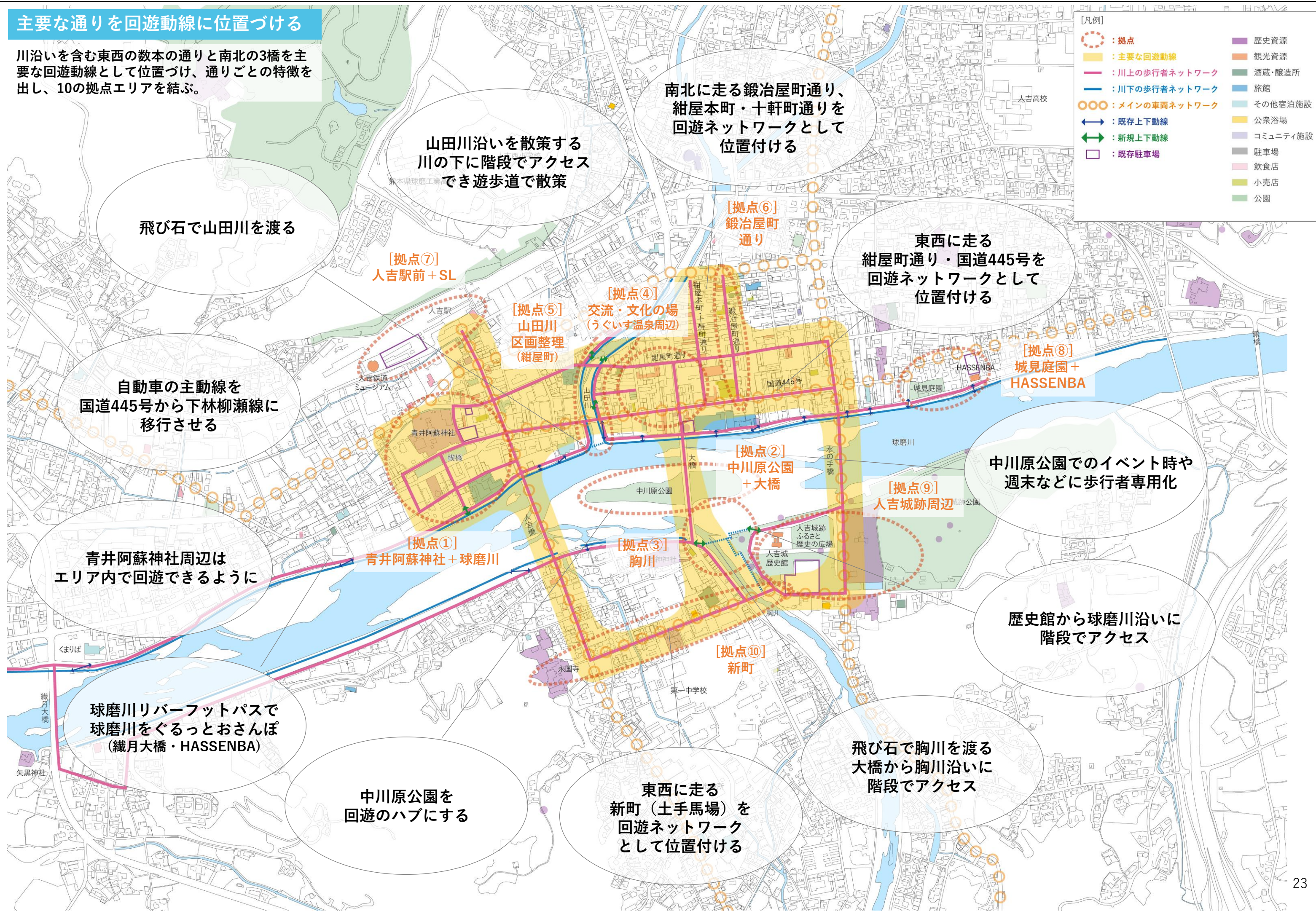
交通・駐車場
・モビリティ

ランドバンク

情報発信

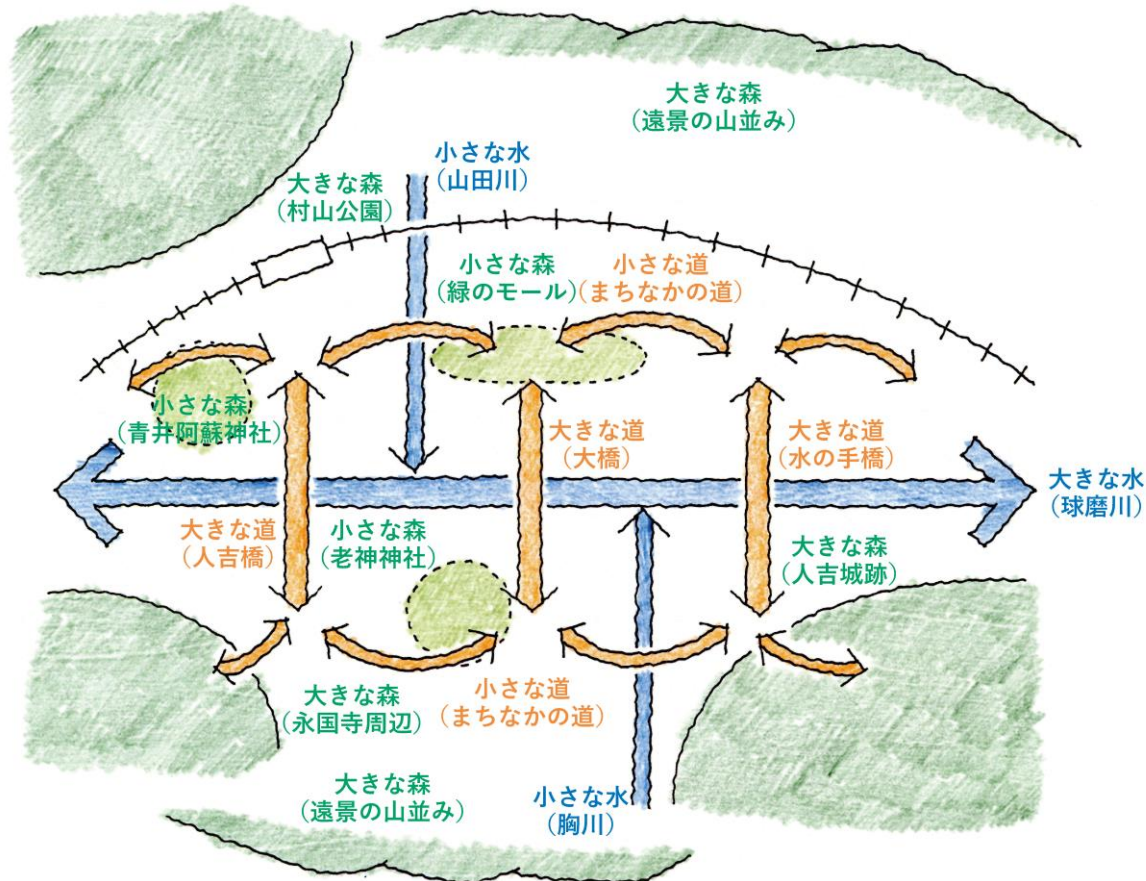
主要な通りを回遊動線に位置づける

川沿いを含む東西の数本の通りと南北の3橋を主要な回遊動線として位置づけ、通りごとの特徴を出し、10の拠点エリアを結ぶ。



■人吉市街地のランドスケープ全体の考え方

球磨川を中心とした人吉市街地を構成する大事な要素である「水・森・道」を雄大なスケールのものから歩行スケールのものに分類し、それぞれの特徴を活かすことで、回遊の変化や楽しさを演出します。青井、中心市街地（山田川周辺）、麓・老神、かわまちづくり（中川原公園・城見庭園など）、人吉駅の5つのエリアを中心に、特徴的な水・森・道を活かした、公共と民間が連携する利活用や賑わいづくりを想定したランドスケープデザインを行っていきます。



■人吉市街地のランドスケープの現況把握

■青井エリア



青井エリアは青井阿蘇神社の森というランドマークがあるだけでなく、前面の球磨川、神社周りの石畳や水路など活かすべき資源が多くあります。一方、既存道路によって神社と川沿いや人吉旅館までの動線が分断されており、回遊ルートの再整備が課題です。現在進められている土地区画整理事業に伴い、南北の「かわまち」と回遊動線を連携させることが望めます。

■麓・老神エリア



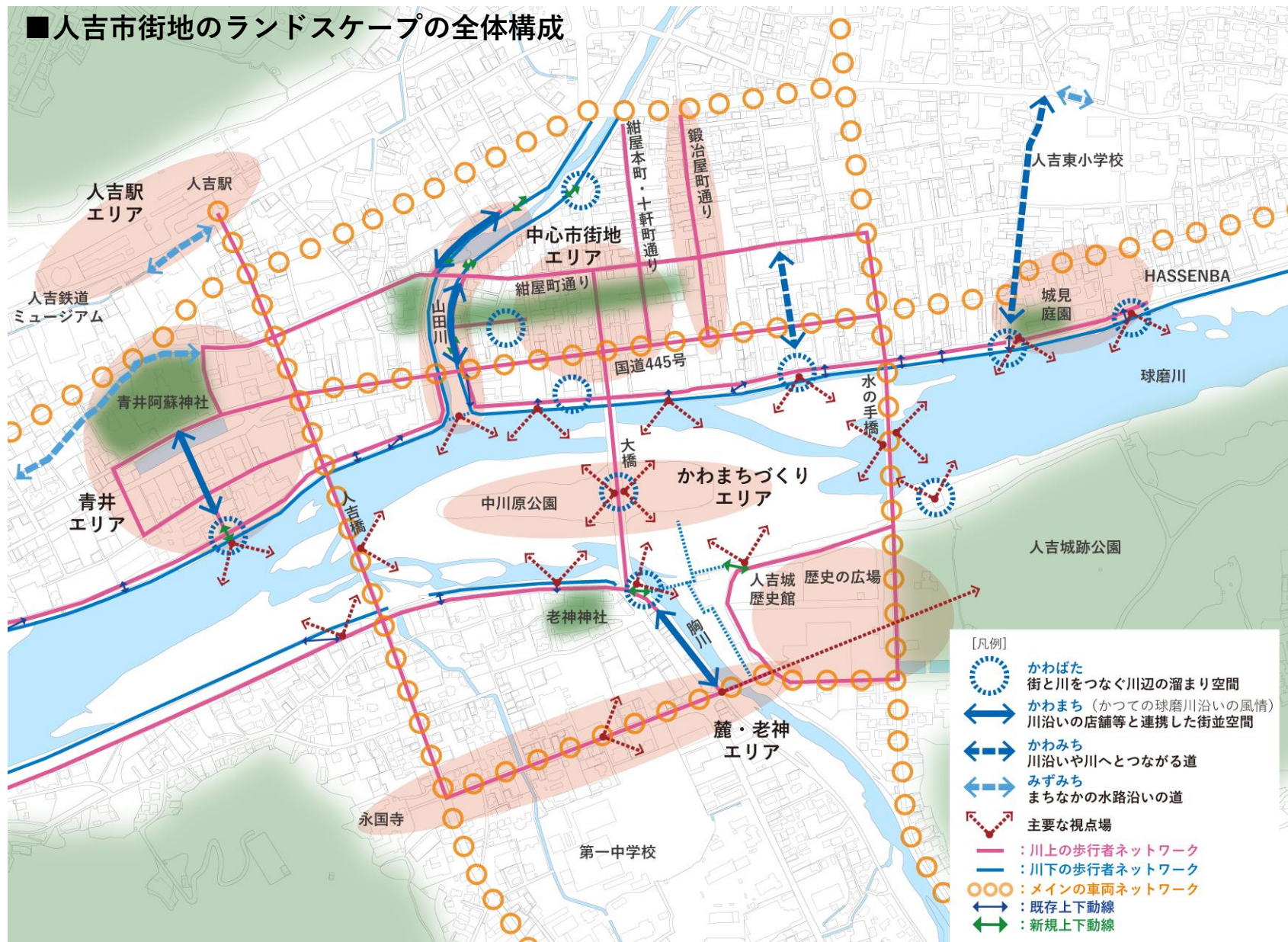
大橋からつながる胸川沿いの店舗・遊歩道を活かした「かわまち」としての魅力向上は重要です。老神エリアには織月酒造や堤温泉もあり、人吉の水や湯の文化を活かしたそぞろ歩きの仕掛けが望めます。

■人吉駅エリア



人吉駅エリアの水路は青井エリアともつながる「みずみち」として活かせる資源の一つです。また、人吉ICから人吉橋へつながる車両動線上は、回遊の拠点となる駐車場整備の候補となる場所です。

■人吉市街地のランドスケープの全体構成



■中心市街地エリア



中心市街地エリアでは空地を活用したコンテナマルシェや新規店舗の軒先活用がみられ、官民が連携した賑わい・回遊づくりが望めます。山田川周辺では既存店舗や区画整理事業の区間で道路のシェアスペース化など川沿いでの利活用を促す整備が望まれ、球磨川沿いでは「かわみち・かわばた」を作る建物もあり、川沿いの建築物のあり方として展開することも考えられます。

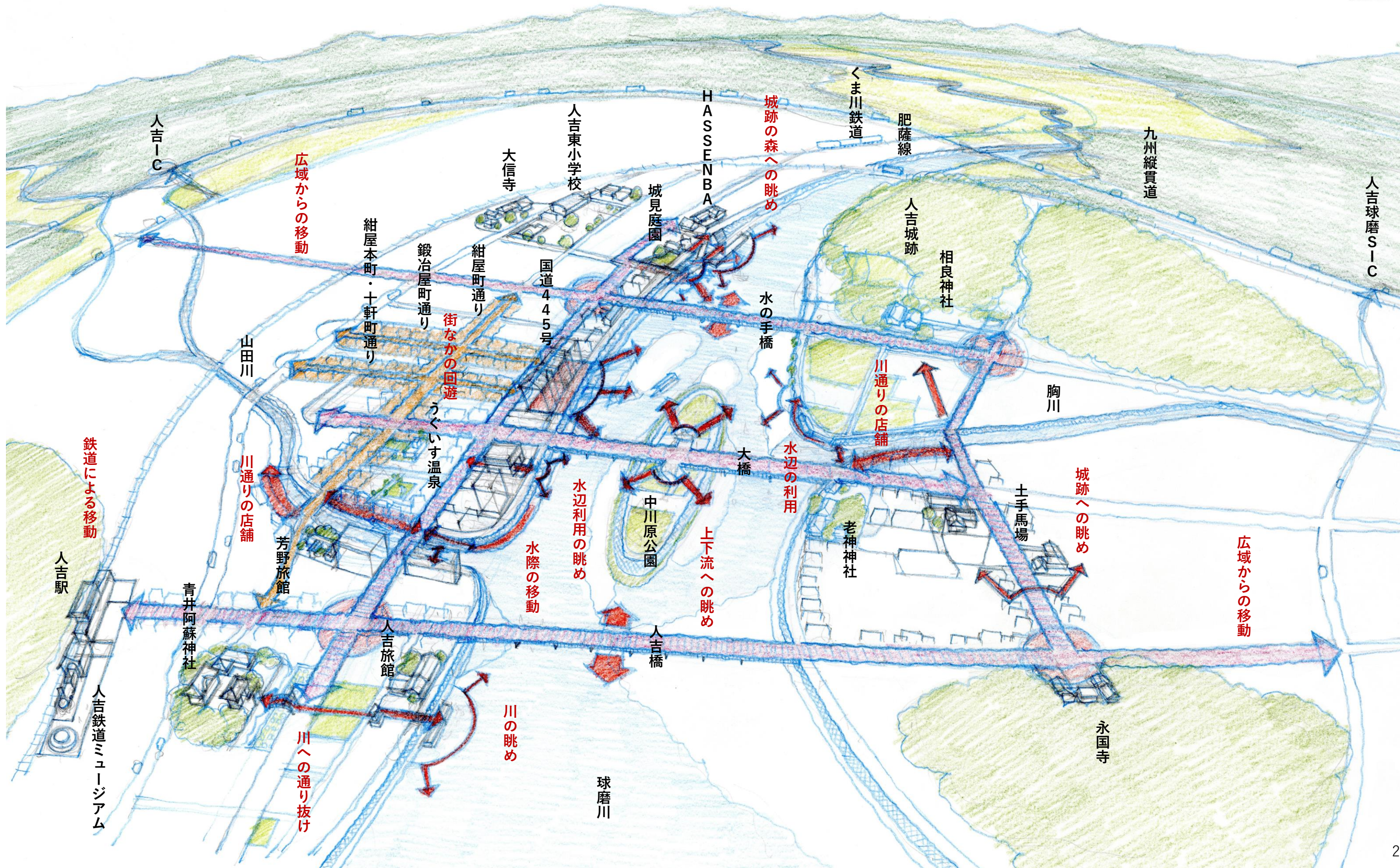
■かわまちづくりエリア



中川原公園や城見庭園周辺のかわまちづくりエリアでは、観光や地域交流の拠点となる場所としての整備が望めます。公園や河川が一体的に利活用できる整備や仕組み作りが求められます。

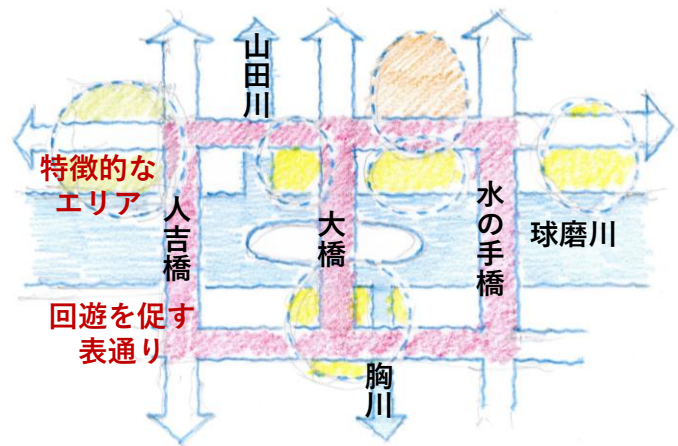
■人吉市街地のランドスケープの視点

人吉球磨の観光の起点となる人吉市街地は、九州縦貫道の人吉IC・人吉球磨スマートICや肥薩線・くま川鉄道によって広域交通ネットワークを形成し、球磨川を中心とした**水文化の拠点**となっています。市内中心部は3つの橋が兩岸を結び、2つの支川（山田川・胸川）と中州（中川原公園）が作る地形によって、**特徴的な景観や水辺の使い方**が生まれています。これらを眺め、巡る視点によって、**人吉らしい風景を活かしたランドスケープの形成**を目指します。



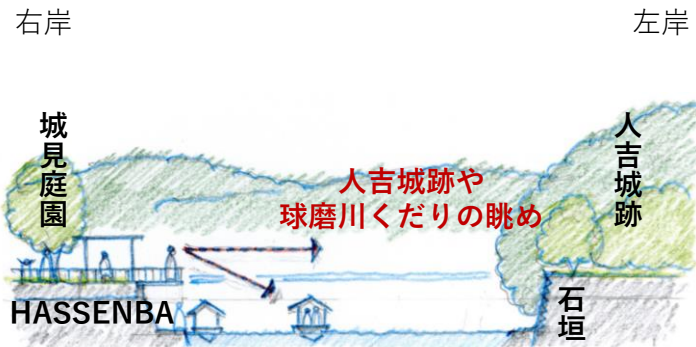
(1) エリア全体 ③ ランドスケープ

1 市街地の主要動線と各エリアの視点



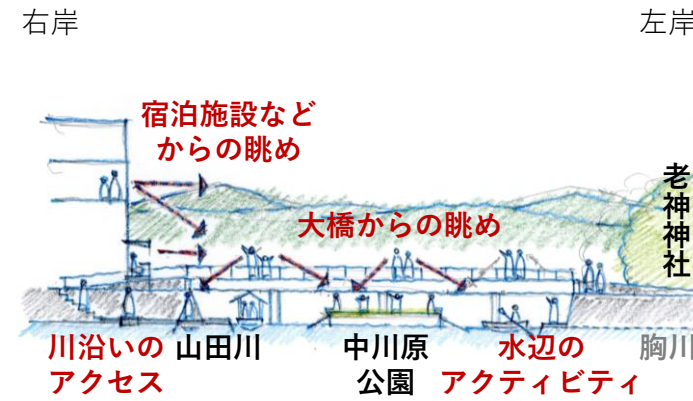
球磨川を中心とした水の手橋から人吉橋までを取り囲む回遊を促す表通りと特徴的なエリアや支川がつながることで、まちなか回遊を促します。

2 川沿いの視点



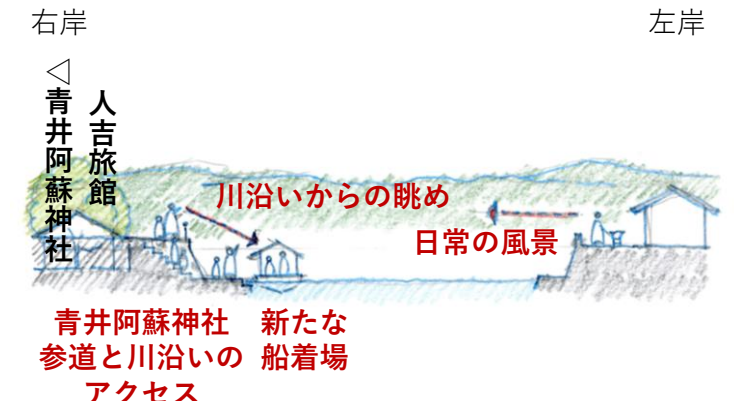
水の手橋より上流の区間

左岸の人吉城跡の石垣や城跡の森を望み、人吉の歴史や球磨川の静けさを感じる区間です。右岸の城見庭園やHASSENBAを主要な視点場とし、落ち着いた雰囲気エリアを目指します。



水の手橋から人吉橋の区間

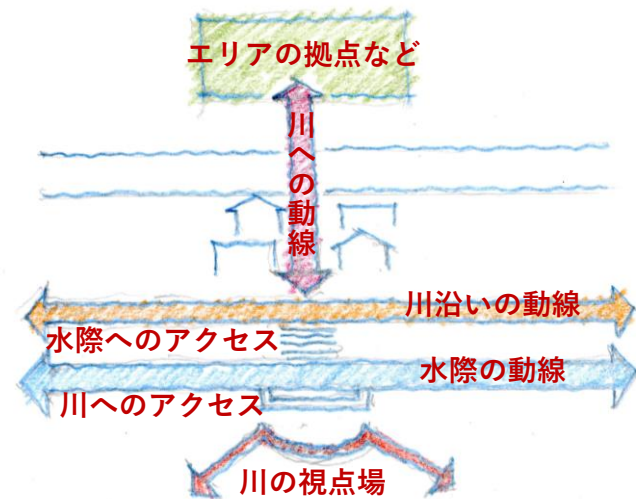
右岸の宿泊施設や店舗から中川原公園や水辺のアクティビティを望み、活動的な球磨川を感じる区間です。山田川や胸川も含めた川沿いの豊かな利活用を促すエリアを目指します。



人吉橋より下流の区間

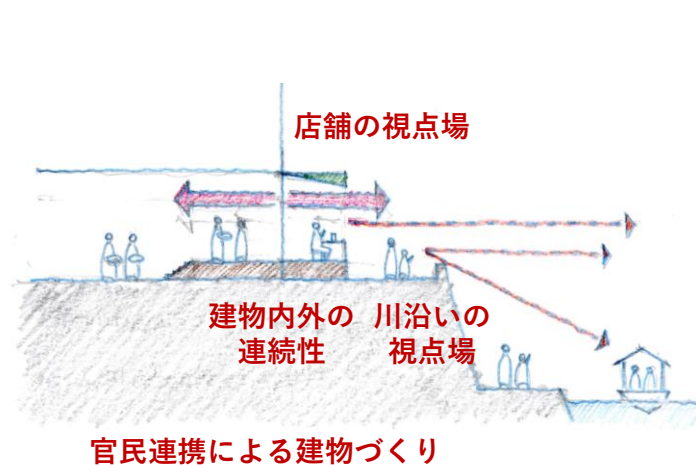
右岸の青井阿蘇神社の森が日常の風景の中で眺められる区間です。川沿いには新たな船着場を設けるなど、青井阿蘇神社と球磨川との結びつきが感じられるエリアを目指します。

3 川通りの視点（かわみち・かわばた・かわまち）



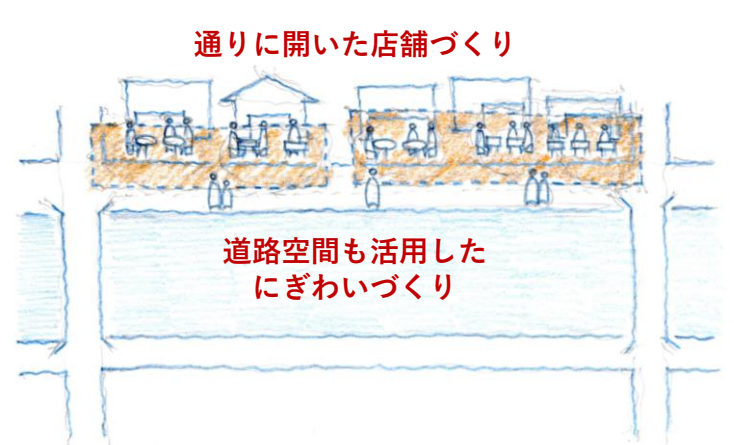
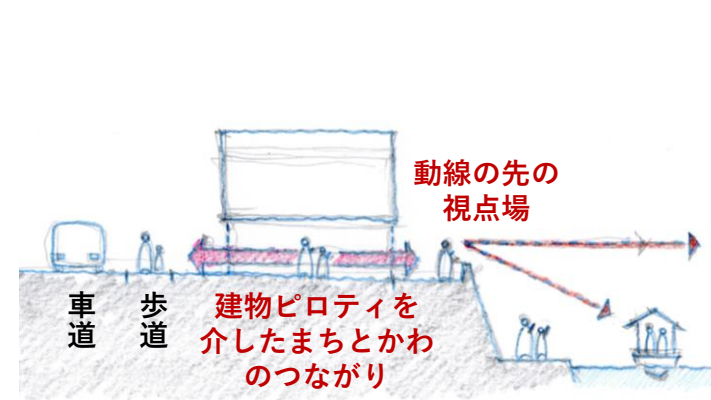
街と川との動線強化とアクセスや視点場

各エリアの拠点などから川への動線を強化し、川へのアクセスや視点場を設けることで、人吉らしい街と川とのつながりや関りを創出します。



川に開かれた街並みの創出

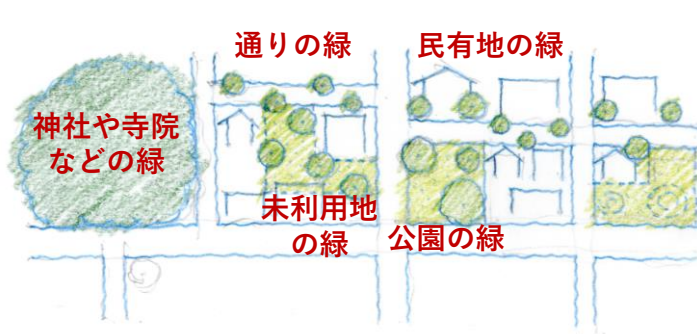
川沿いの民有地とも連携し、球磨川の風景を活かした宿泊施設や店舗づくりを促します。水害対策としてのピロティ構造は川への視線の抜けや動線としても有効な作り方です。



川通りでのにぎわいの創出

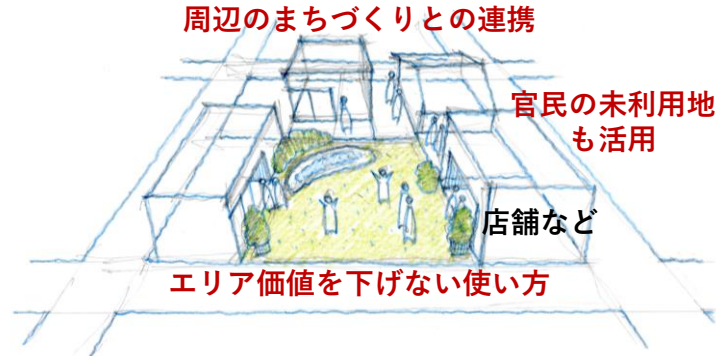
川通りでの店舗などの営みは人吉らしい暮らしのひとつです。飲食などもしやすい道路空間づくりを行い、官民連携で川沿いでのにぎわいの創出を目指します。

4 街なかの森・未利用地の視点



街なかの森の連続

神社や寺院などの既存の森や樹木を緑の拠点とし、新たに整備する公園や通りへの緑の配置や未利用地を含む民有地への植栽を促すことで街なかの森を連続させていきます。



未利用地の景観づくり

行政や民間の未利用地をランドバンクの仕組みを作ることで暫定的活用につなげます。

5 通りの個性の視点

国道445号：青井阿蘇神社から宿泊街、HASSENBAを結ぶ目抜き通りとして、各々の街並みを尊重し、舗装や照明等の一貫した基盤整備を沿道とも連携します。

紺屋町通り：飲食街の通りとして、歩行者を優先し、夜間の歩きやすさも確保します。

鍛冶屋町通り：歴史のある通りとして、趣のある建物の作りを保全・展開し、滞留ベンチや小広場を活かします。

紺屋本町・十軒町通り：新旧の飲食店舗が並ぶ通りとして、観光客も訪れやすい基盤整備を沿道とも連携します。

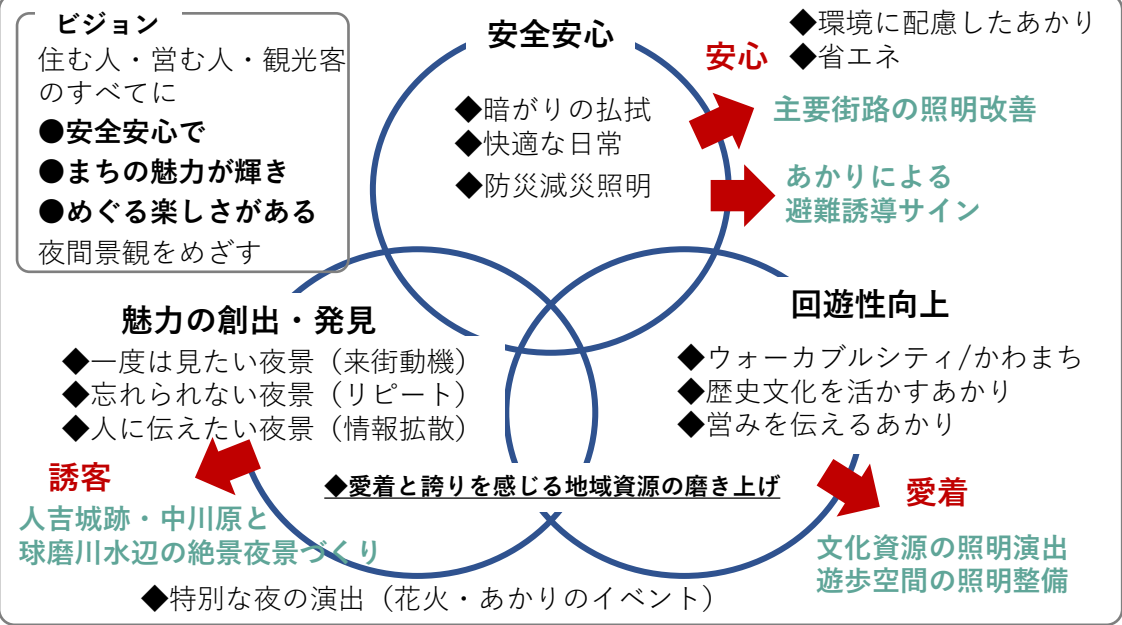
土手馬場(新町)：人吉城跡と永国寺を結ぶ歴史のある通りとして、武家屋敷や酒造等の沿道とも連携します。

6 素材の視点

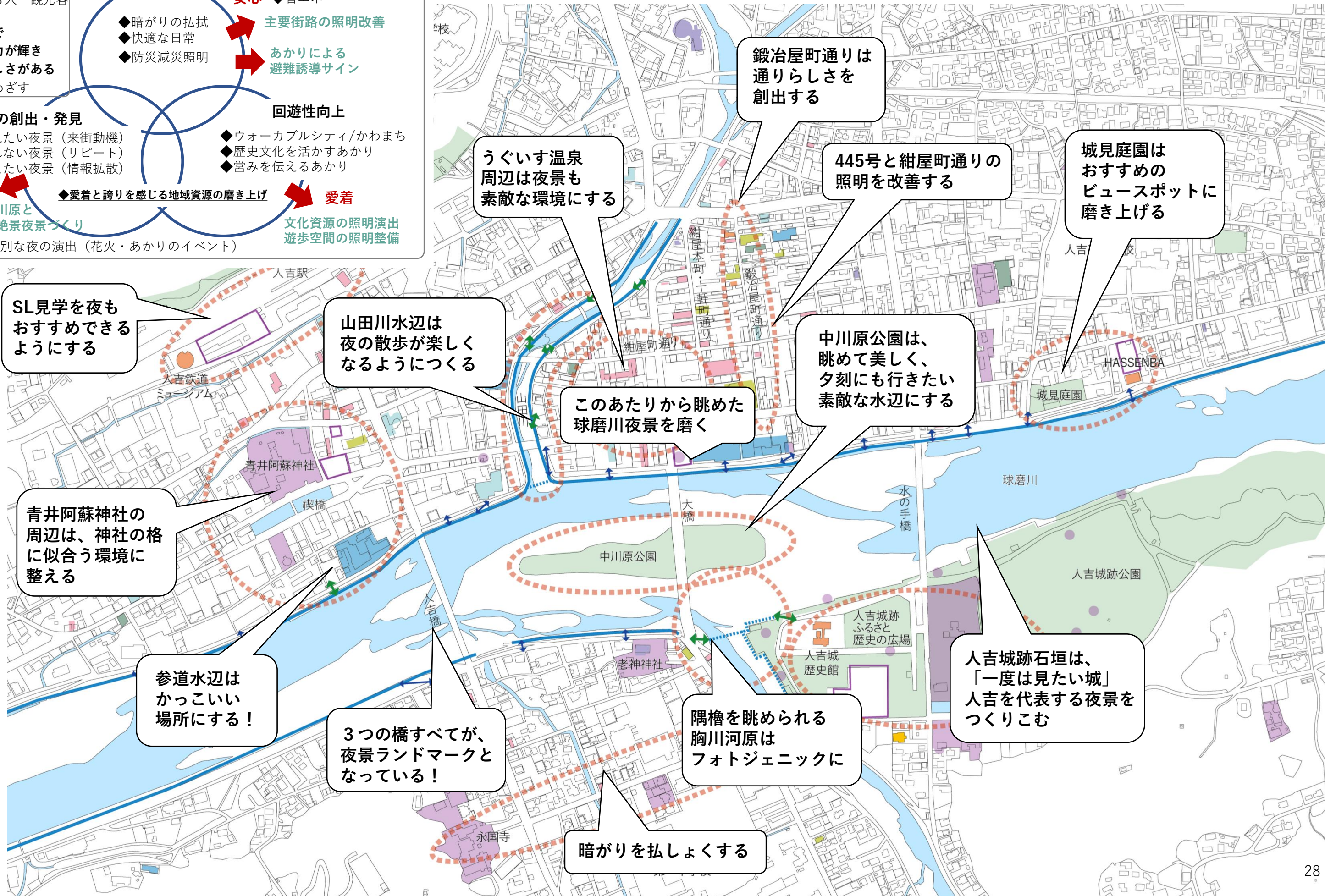
川城である人吉城跡の石垣を尊重し、球磨川や山田川、中川原公園の河川整備では石積み護岸を用いることで人吉や球磨川の歴史や景観、環境に配慮した素材とします。青井阿蘇神社周辺では、神社の趣を感じられる石畳を公共用地でも使っていきます。

現況の分析

「球磨川夜景」形成の骨子



重点各エリアの照明整備の方向性



青井阿蘇神社周辺

- ①国宝青井阿蘇神社の品格と歴史的価値を感じさせる神社周辺を含む夜間景観形成
- ②河川からの参道の視覚化と、エリアの安全安心の確保
- ③河川域の魅力的な夜間景観形成



人吉駅+SL人吉

- ①SL人吉号を魅力的なランドマークとして演出する
- ②SL設置に伴う駅前広場の魅力化と安全安心の確保



山田川・区画整理(紺屋町)

- ①散歩が楽しくなる道路空間の創出(建物からの漏れ光も含む)
- ②河川内遊歩道の夜間の安全安心の確保
- ③飛び石や橋は、眺めても渡っても心地よい
- ④紺屋町道路空間の夜間景観改善



鍛冶屋町通り周辺

- ①風情のある街路空間の維持と更新
- ②明るさ感の補強と影絵ストリート

うぐいす温泉周辺

- ①拠点の魅力がにじみ出し、エリアの魅力が高まっているような夜間景観形成。
- ②拠点に至る主要動線や周辺空地等が夜間にも安全安心であること。
- ③紺屋町道路空間の夜間景観改善

各橋梁

- ①手すり照明や橋脚ライトアップなどを行い夜景ランドマークとして活かす
- 大橋(最重点): 道路照明変更・手すり照明
橋脚ライトアップ
- 手すり照明: 出町橋、二条橋、三条橋、大手橋
- 橋脚ライトアップ: 人吉橋

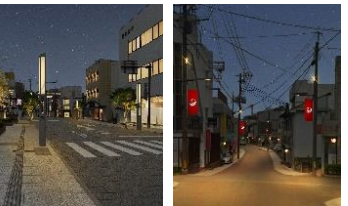
城見庭園・HASSENBA

- ①城見庭園・HASSENBAは主要な夜間景観エリア・眺望視点場となる
- ②暗がりを払しょくし、情緒的な陰影のあるエリアとして整える



重点道路

- ①国道445号
- ②紺屋町通り



中川原公園・胸川

- ①球磨川右岸からの最重要夜景エリアであるため「眺めて楽しむ」エリア価値を創出する。(石積み護岸の対岸からの照射も検討)
- ②橋梁・城跡石垣・中川原公園は重要な夜景ランドマーク
- ③中川原公園は夕刻から夜間にも静かな利活用が可能な明るさ感を確保する(橋上からのポールのスポットライトによる投光等)



土手馬場(新町)

- ①青井阿蘇神社から人吉城跡をつなぐ主要な回遊ルートとして暗がりを払しょくし、夜間の安全・安心の確保



凡例

- 道路照明新設(重点)
- 道路照明新設(汎用品)
- ライトアップ
- ライトアップ(既設)
- 影絵
- ビュー

人吉城跡・歴史館

- ①「川に浮かぶ城」としての石垣の通年ライトアップの実施
- ②二の丸三の丸石垣のライトアップ及び、石垣を見えるようにするための樹木の伐採
- ③「眺める夜景の城」としての具体的なライトアップ実施※各地の城は夜間は眺める対象



交通・駐車場・モビリティの考え方

【主な現状・課題】

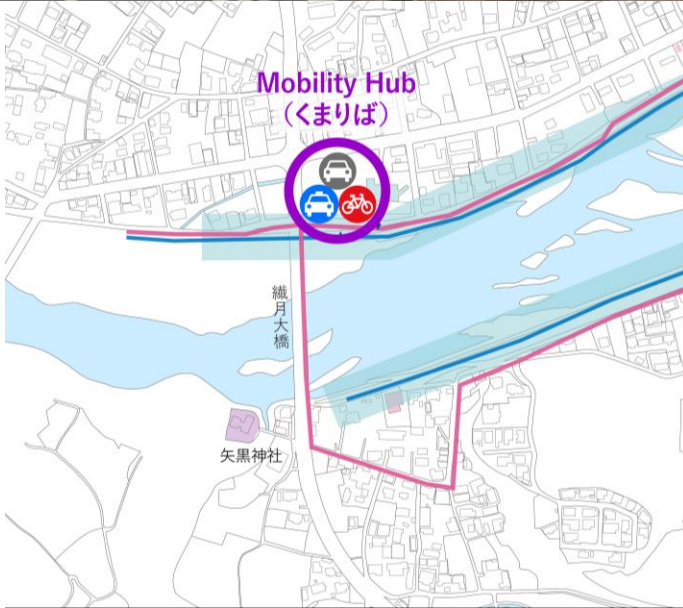
- 公共交通
- ◇JR、くま川鉄道ともに運休
(バスによる代替輸送)
◇まちなかから離れた人吉ICでの高速バス接続
◇じゅぐりっと号により人吉駅〜人吉IC間を
接続しているが高速バスをカバーできて
いない
◇クルマ移動が中心で公共交通の利用者が減少
◇バス、タクシーともに運転手が不足
- 駐車場
- ◇来街者用の駐車場がほとんどない
(現状の駐車状況の確認が必要)
◇駐車場がどこにあるかわかりにくい
- シェア
サイクル
- ◇6箇所の宿泊施設にポートを配置
◇民間事業としては採算性が厳しく規模縮小
(50台10箇所→20台6箇所、30台在庫あり)
- 交通
道路
規・
制
- ◇全体的にクルマ中心の道路構造
◇自転車通行空間が整備されていない
◇歩行者・自転車での回遊動線がわかりにくい

※MaaS：Mobility as a Serviceの略。地域住民や旅行者一人一人のトリップ単位での移動ニーズに対応して、複数の公共交通やそれ以外の移動サービスを最適に組み合わせで検索・予約・決済等を一括で行うサービス。

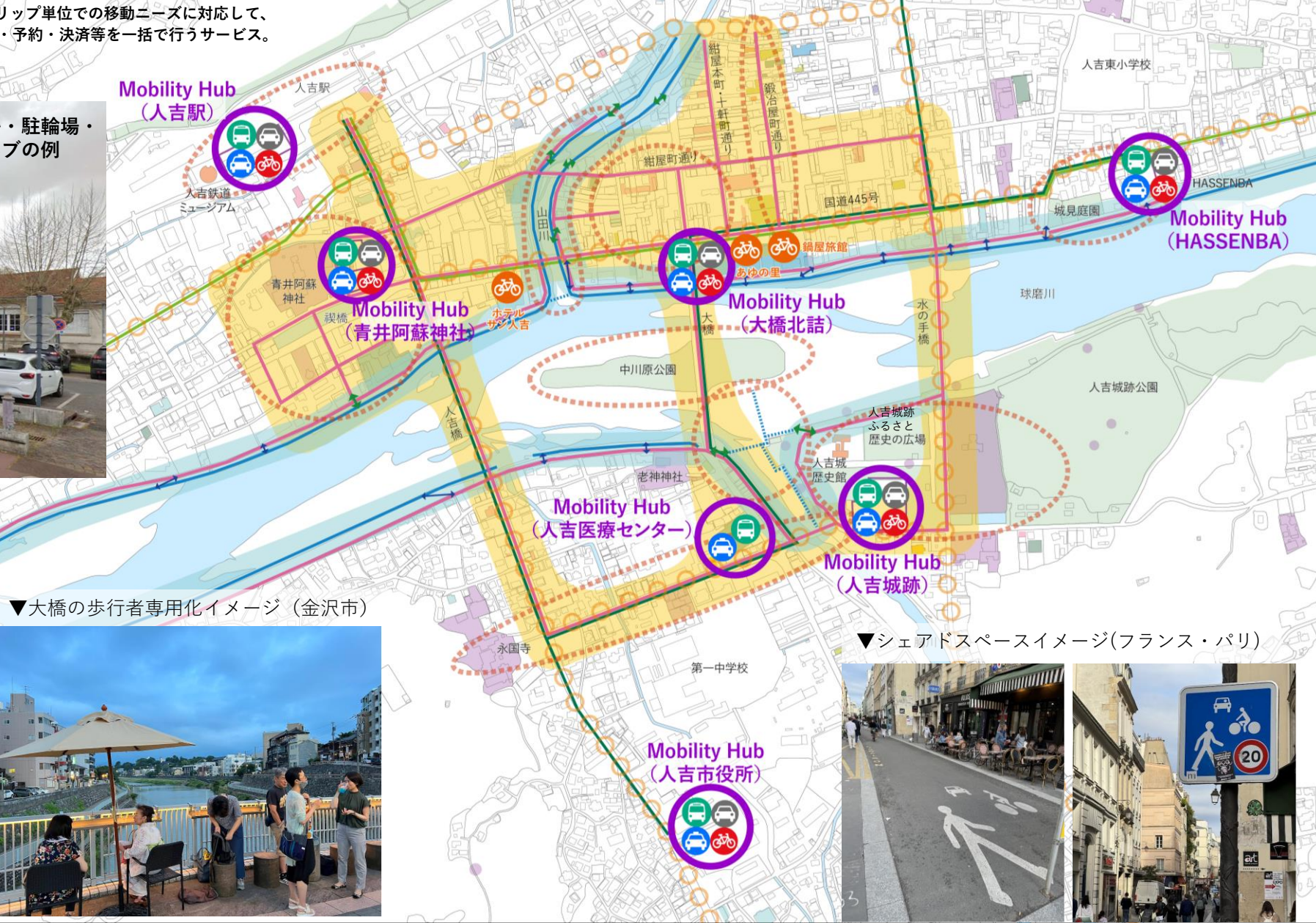
▼モビリティハブイメージ(フランス・ボルドー)



駐車場・バス停・シェアサイクル・駐輪場・案内板が整備されたモビリティハブの例



▼大橋の歩行者専用化イメージ(金沢市)



▼シェアスペースイメージ(フランス・パリ)



▼自動運転バスイメージ(岐阜市)



▼既存のシェアサイクルサービス



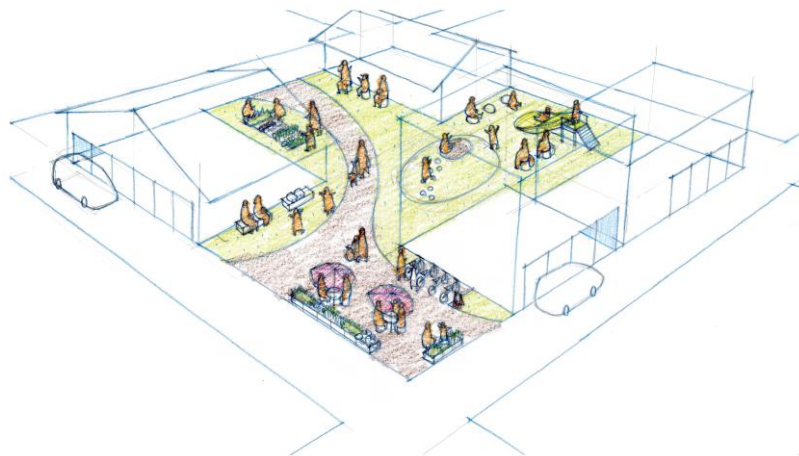
▼自転車通行空間イメージ(高槻市)



「人口減少への対応」と「エリア魅力向上」を両立する 未利用地を「ストック→フロー化」、エリア魅力に活用する仕組み

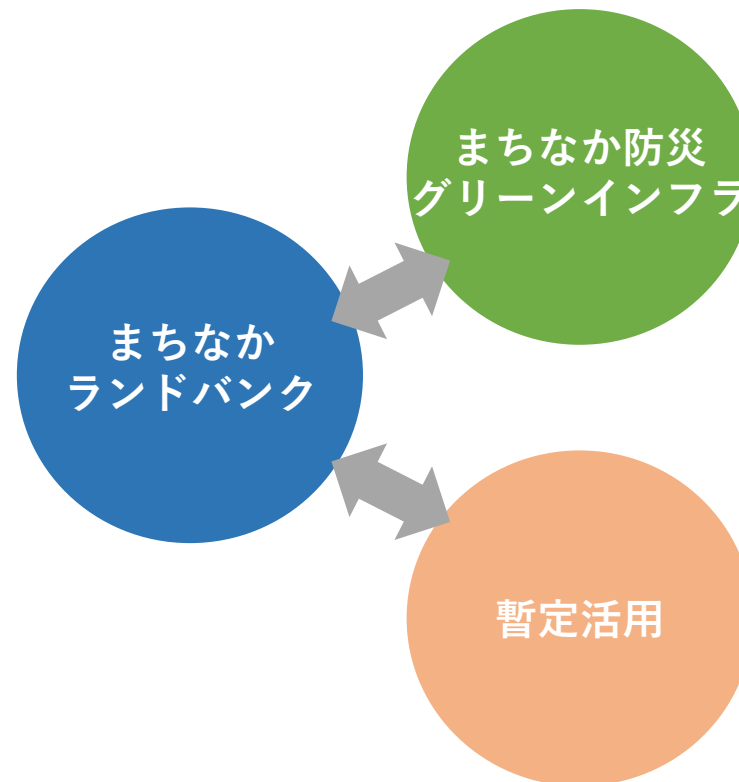
昨今の全国的な災害の後、人口減の流れもあり以前のようにすべての土地で再建が行われず、空き地として残るケースが多くみられる。以前のように密な状況を求めるのではなく、疎な状況でも周辺環境を悪化させない、豊かな使われ方に変えていく工夫が求められる。雑草が生い茂り放置された状況ではなく、暫定的に子どもの遊び場、グリーンを配した駐車場、期間限定店舗などの市民活用につなげていく。

土地所有者の使い方は決まっていらないが自ら保有しておきたいというニーズに対応して、所有権を持ったまま、暫定的に活用を委ねられる仕組み、人吉まちなかランドバンク（人吉LB）をつくる。
行政と民間の運営団体が連携し、土地所有者と活用希望者をマッチングする。



空き地の維持管理・活用の仕組み (土地利用需要が増えない前提で エリア価値を維持する)

- ・ 空き地オーナーの意向確認
- ・ 重要な場所を優先的に取り組み
- ・ 借上げ公園のような固定資産税減免等のインセンティブ
- ・ 必要に応じて活用希望者マッチング、提案機能



防災・緑の流域治水に寄与 (空き地の一部をグリーンインフラ として維持管理)

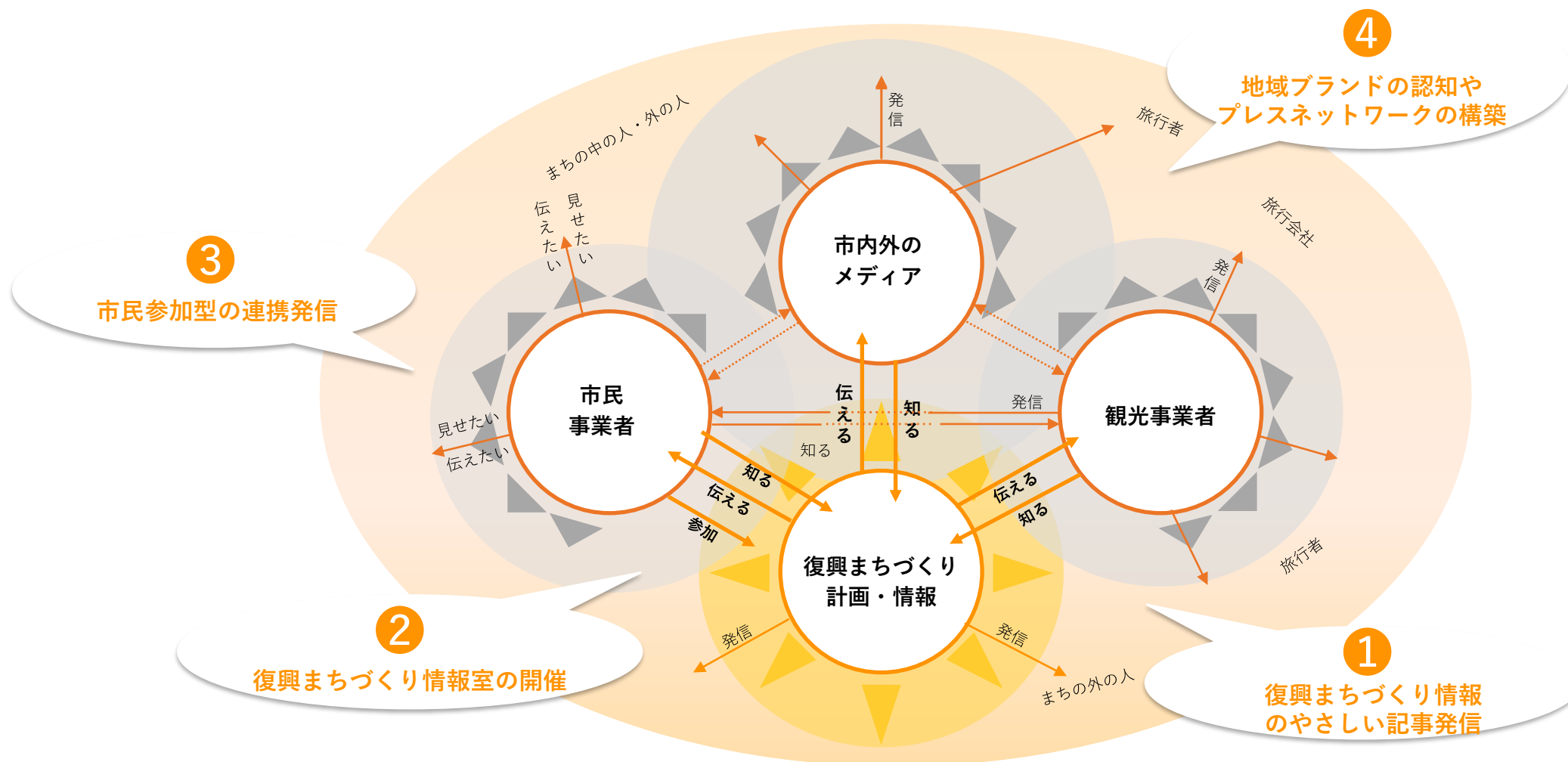
- ①敷地→雨庭（雨水浸透）
- ②道路・公園の公共施設の雨水浸透
- ③防災 緩衝帯・避難路の確保
- ④カーボンクレジットによる循環

暫定活用 (店舗・滞留空間・農地等)

- ・ 活用希望者マッチング

共感と愛着につないで 情報の拡大と拡散を生む「まちの発信力を向上するアクション」

復興まちづくりの情報を行政から民間事業者や市民へ共有するため、情報発信の基盤づくりに取り組む。メディア、事業者、市民へ共有することで情報の循環、参加の機会を促し、まちの中の人、外の人へ情報が拡散される連携をつくる。



民間事業者・市民へ共有→参加と発信

共感と愛着で「まちの発信力」を向上するアクションの仕組み&ステップ

4つのアクションをステップとして情報発信の連携と協働の実現を目指す。

仕組み&ステップ

1

復興まちづくり情報の
やさしい記事発信

現在の「復興まちづくり」の計画にまつわる情報の発信における「見つけづらさ」「読みにくさ」「分かりづらさ」の解決に取り組み、広い層が読みやすいやさしい記事発信を行い、地域内外に情報を届ける。

仕組み&ステップ

2

復興まちづくり情報室
の開催

復興まちづくりの情報を共有したい行政、知りたい事業者や市民、発信したいメディアなどが会し、情報交換と連携発信を生み出す場所にとらわれないサロンの場づくり。

ポイントは3つ。

- ①情報共有や課題共有のための関係と場づくり
- ②セミナーやWSによる発信スキルアップ
- ③キーワードを使った市民参加型発信づくり

現在の市の復興まちづくり情報発信例



難しい行政資料

やさしい記事発信へ

「読みにくい」を
「読みたくなる」に変える

仕組み&ステップ

3

市民参加型の連携発信

市内で活動するメディアや事業者発信・個人発信のSNSでキーワードを使った連携発信を起こすことで、まちの発信総力を高める。市内の多くの情報発信メディアやアカウントが活動する人吉市の強みを活かす。

市からの記事配信による情報共有によって、市内発信プレイヤーが率先した参加や発信と連携する。情報接触機会を増やし、来訪者による発信や双方の循環を促す。

仕組み&ステップ

4

地域ブランドの認知や
プレスネットワークの構築

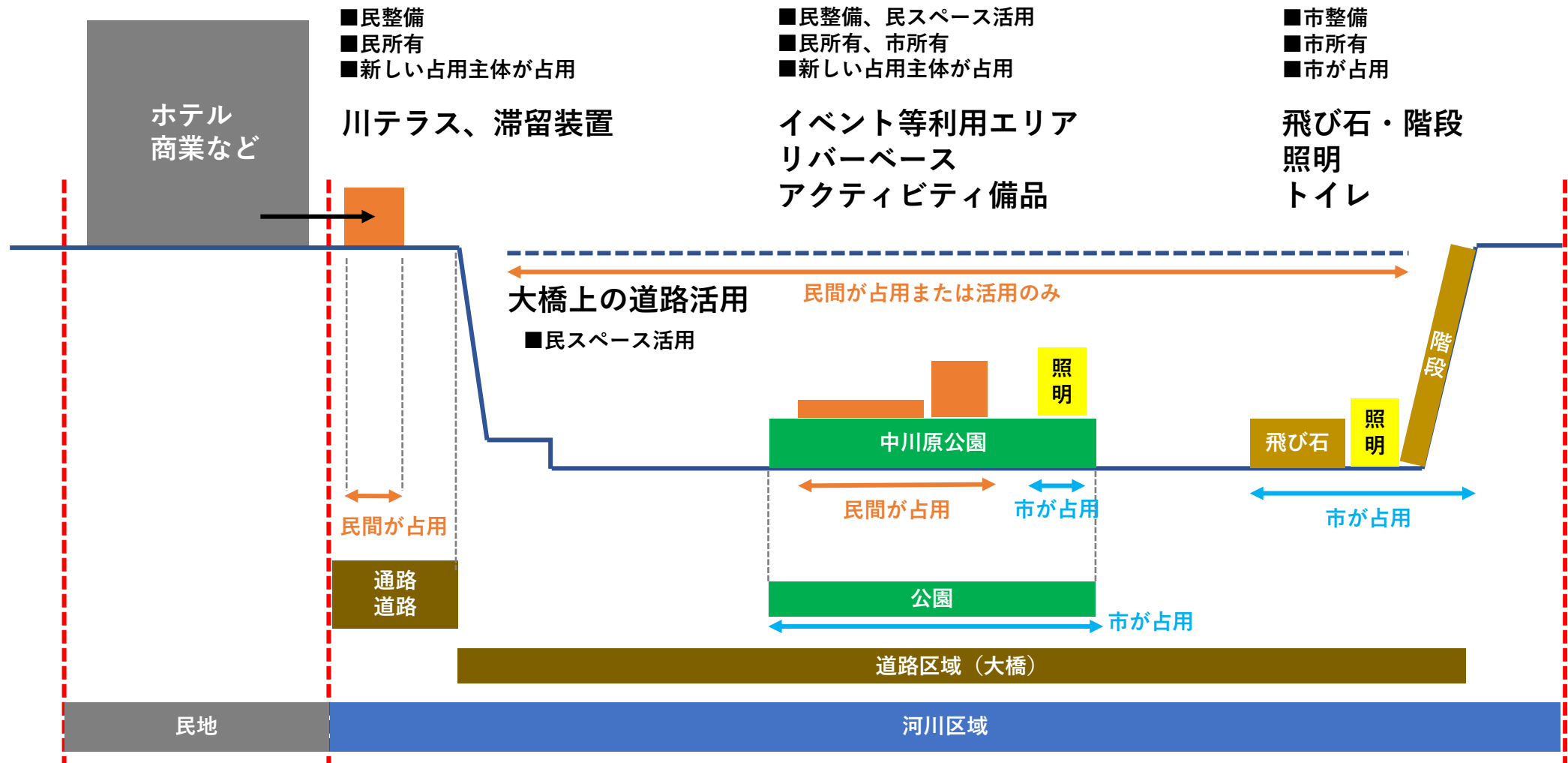
発信循環の中で生まれる地域ブランド認知を可視化し、ブランド力の定着と維持を目指した長期広報計画に取り組む。市民による発信と並行して、行政主体のプレスネットワークの構築と、適切な情報発信の継続から、地域ブランドの認知向上に長期的に取り組めます。

- ・復興まちづくりについての記事配信（行政→市の内外）
参加できる社会実験についての情報発信（行政→市の内外）
- ・復興まちづくりについてのプレスリリース配信（行政→市内外のメディア、題材が該当するメディア）
- ・復興まちづくりによる新しい見どころについてのプレスリリースや情報提供（行政→題材が該当するメディア）

まちへの愛着とまちのブランド
を高める循環を育てる

河川区域・公園区域・道路区域の占用スキーム（案）

- ・河川区域・公園区域・道路区域における、整備主体・所有主体・占用主体は以下のイメージである
- ・河川→都市・地域再生等利用区域、公園→指定管理または設置許可、道路→道路協力団体、などの特例制度を活用し、区域区分を超えて一括してひとつの主体が占用して運営管理できる方法を検討する



復興まちづくりにおいては長期にわたっての公共・民間開発・工事が想定されるため、それらを良好に推進するためのガイドラインが必要となる。地域の誇る「球磨川の景観」「まちの歴史と文化」を維持し発展させていくために、今後の課題として以下のガイドライン策定を検討していく。既存の景観計画やガイドライン等との整合を図りつつ、新たな方向性を検討する。

[景観形成の方向性（案）]

景観ガイドライン			夜間景観ガイドライン
①川への視線の抜け	②川への視点場	③街並み	公共照明の設置に関するルール
対象：川に面した建物 エリア指定	対象：川・城・中川原などを見渡せるポイント周辺	対象：主要回遊動線沿い建物 エリア指定	対象：道路照明・広場公園照明
民間	公共・民間	民間	公共
例) ・川沿いに面した建物の1階を川への視線が抜けるように工夫 ・眺望景観のルール [参考：土佐堀通景観ガイドライン]	例) ・眺望を確保、引き立てる設え ・佇めるような設え [参考：広島市景観形成ガイドライン]	例) ・建物形状/ファサード/素材 ・工作物形状/配置計画/素材 ・照明/看板/色彩/緑などの統一 [参考：長門湯本温泉 景観ガイドライン]	例) ・道路照明のルール ・広場/公園照明の考え方 [参考：平戸市夜間景観ガイドライン]
参考 イメージ	参考 イメージ	参考 イメージ	参考 イメージ

まちなかの価値を伝えるサイン計画・整備を行う

まちなかの情報を適切に伝え案内するための統一感あるサインについて、以下のプロセスを通じて計画づくり、整備を行う。

- ①まちなかの既存サインの現状／課題を把握する
- ②課題等への対応を踏まえ、まちなかのサインに関する基本方針を作成する
- ③基本方針に基づき、配置計画、表示計画、意匠計画を作成する

表示計画：書体、文字の大きさ、ピクトグラム、色彩、多言語表記、維持管理等の表示のルールを設定する

意匠計画：周辺との調和や見やすさ等に配慮したサイン本体のデザインを設定する

サイン：案内／誘導／位置／説明／規制／広報サイン等を対象と想定する

観光地経営に継続的に取り組んでいくための「財源」と「担い手」が必要

これからの観光においては、市民の生活満足度向上と観光地魅力向上の両輪を進めことが求められる。それには、地域住民・関係人口、観光客、働き手のそれぞれの共感や満足度を高めるため、以下の3つの要素に取り組みたい。主体としては、関係する既存組織の役割や対象エリア、各々の経営資源を確認しつつ、必要に応じて新たな財源や担い手の検討を行う。

観光地経営の3つの要素

**地域住民
関係人口**
の共感・参画

**地域観光戦略
づくり**

- ・戦略立案、事業推進
- ・エリアマーケティング
- ・対観光客情報発信
- ・コンテンツ企画

観光客
の満足

**ローカル
ディベロッパー**

- ・不動産事業（空物件活用）
- ・公共空間運営（河川道路公園）
- ・事業者誘致
- ・駐車場運営

働き手
の満足

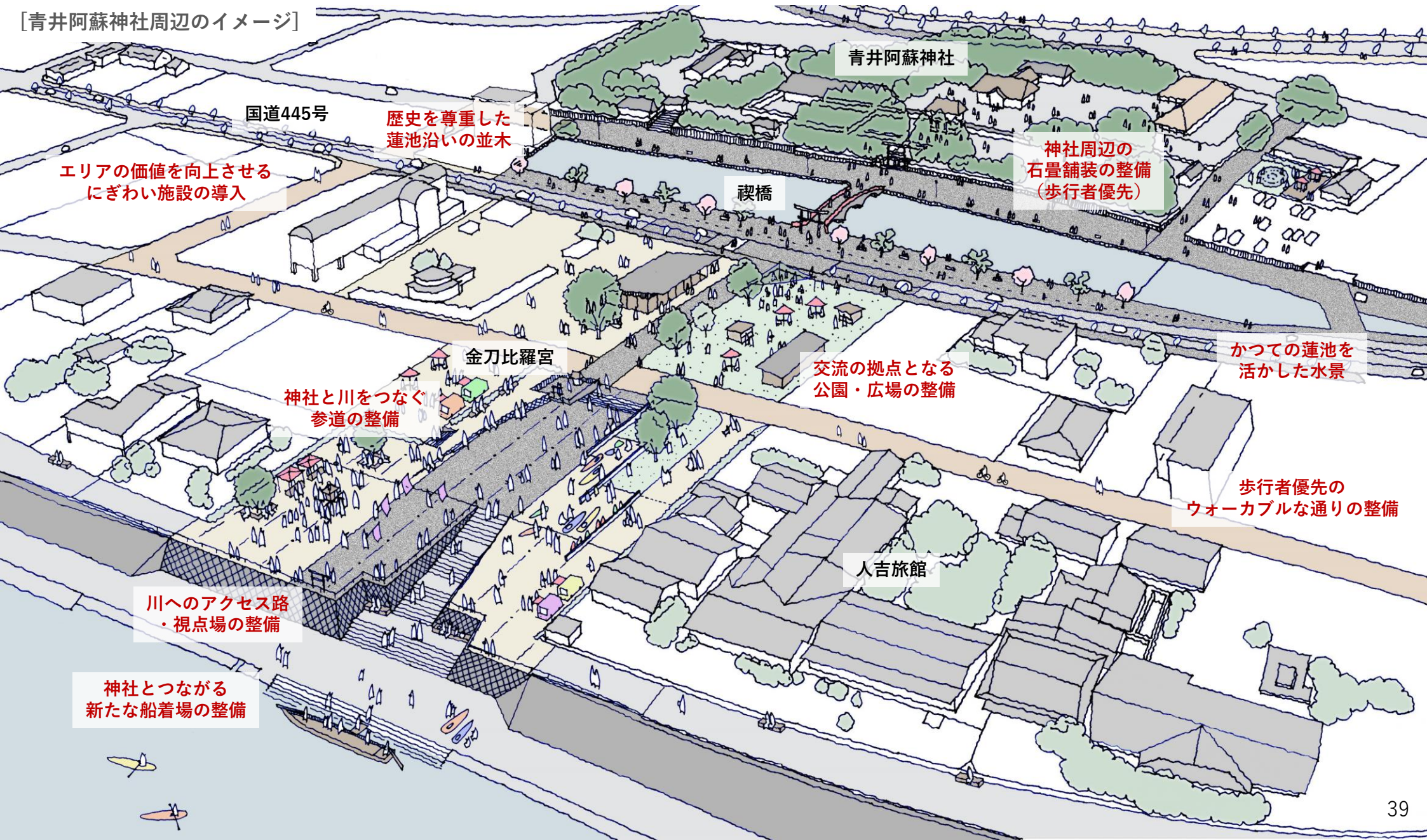
**地域事業環境
づくり**

- ・地域事業者支援
- ・働く魅力づくり
- ・地域循環の促進

青井阿蘇神社は人吉球磨に残る数々の歴史的建造物の代表であり、人吉球磨地域住民の心の拠り所である。人吉球磨に点在する歴史的建造物や相良三十三観音、日本遺産をつなぐ拠点としての機能を強化する。

青井阿蘇神社周辺では、歴史性を活かした石畳を参道から球磨川まで連続させ、神社の森と球磨川の水をつないでいく。また、エリア内の道路は歩行者を優先とした回遊動線として高質化整備を行い、新たにできる広場や公園では公民連携事業による市民・来訪者の交流の拠点をつくる。

[青井阿蘇神社周辺のイメージ]



あかりのキーワード

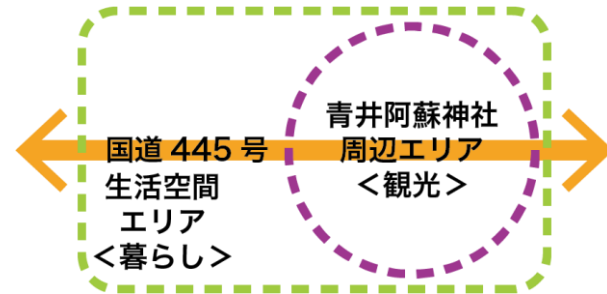
厳かさに満ちた上質なあかりの重層

[青井阿蘇神社周辺の夜間景観イメージ]

- ①国宝青井阿蘇神社の品格と歴史的価値を感じさせる神社周辺を含む夜間景観形成
- ②河川からの参道の視覚化と、エリアの安全安心の確保
- ③河川域の魅力的な夜間景観形成



○青井阿蘇神社周辺の考え方

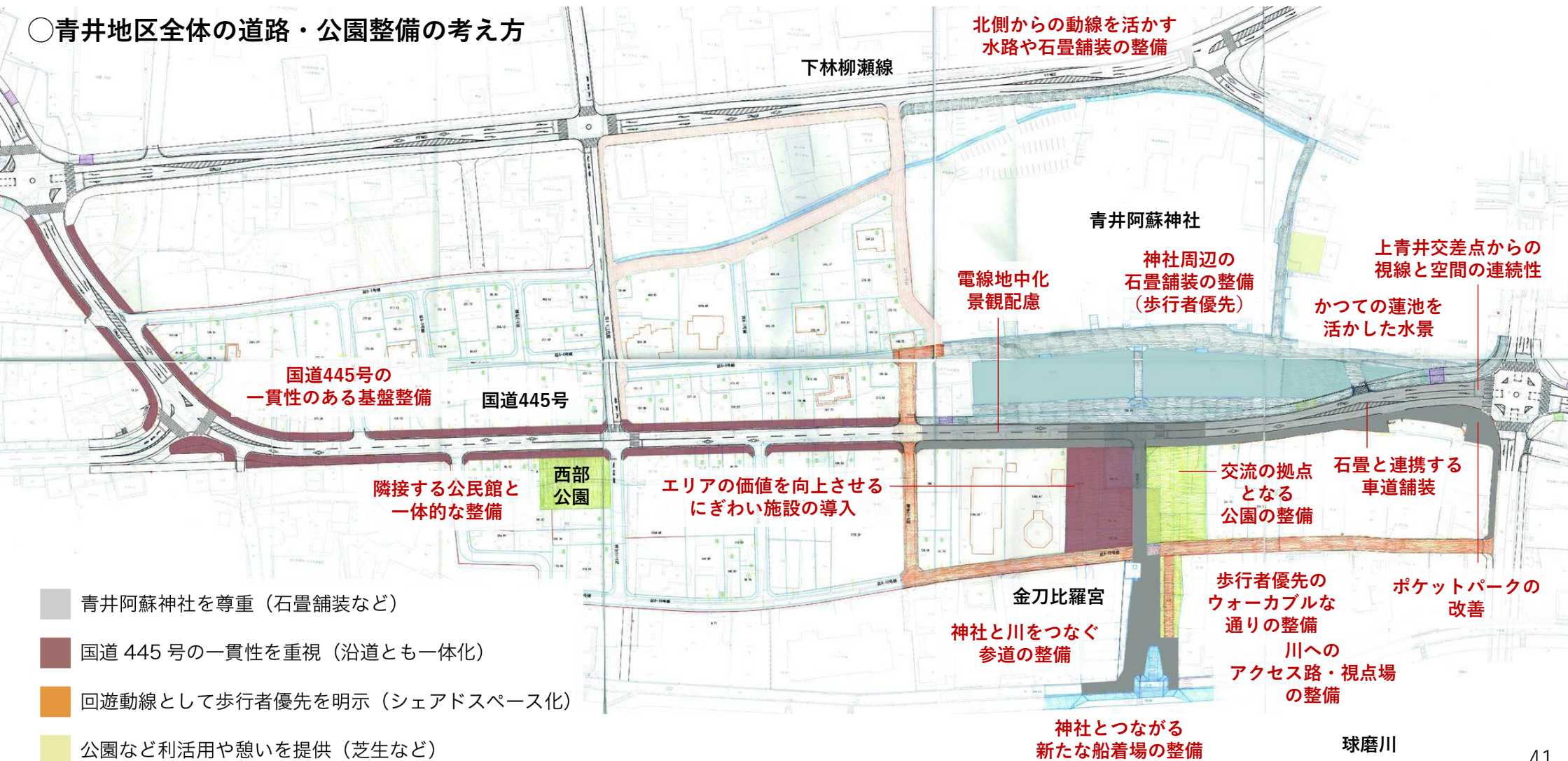


青井阿蘇神社周辺では観光の拠点として、来訪者が訪れたいくなる回遊性の向上や利活用を促します。また、その周辺エリアは地元の生活空間でもあるため、日常的な快適性の向上を目指します。国道445号では通りの一貫性を持った基盤整備を行います。

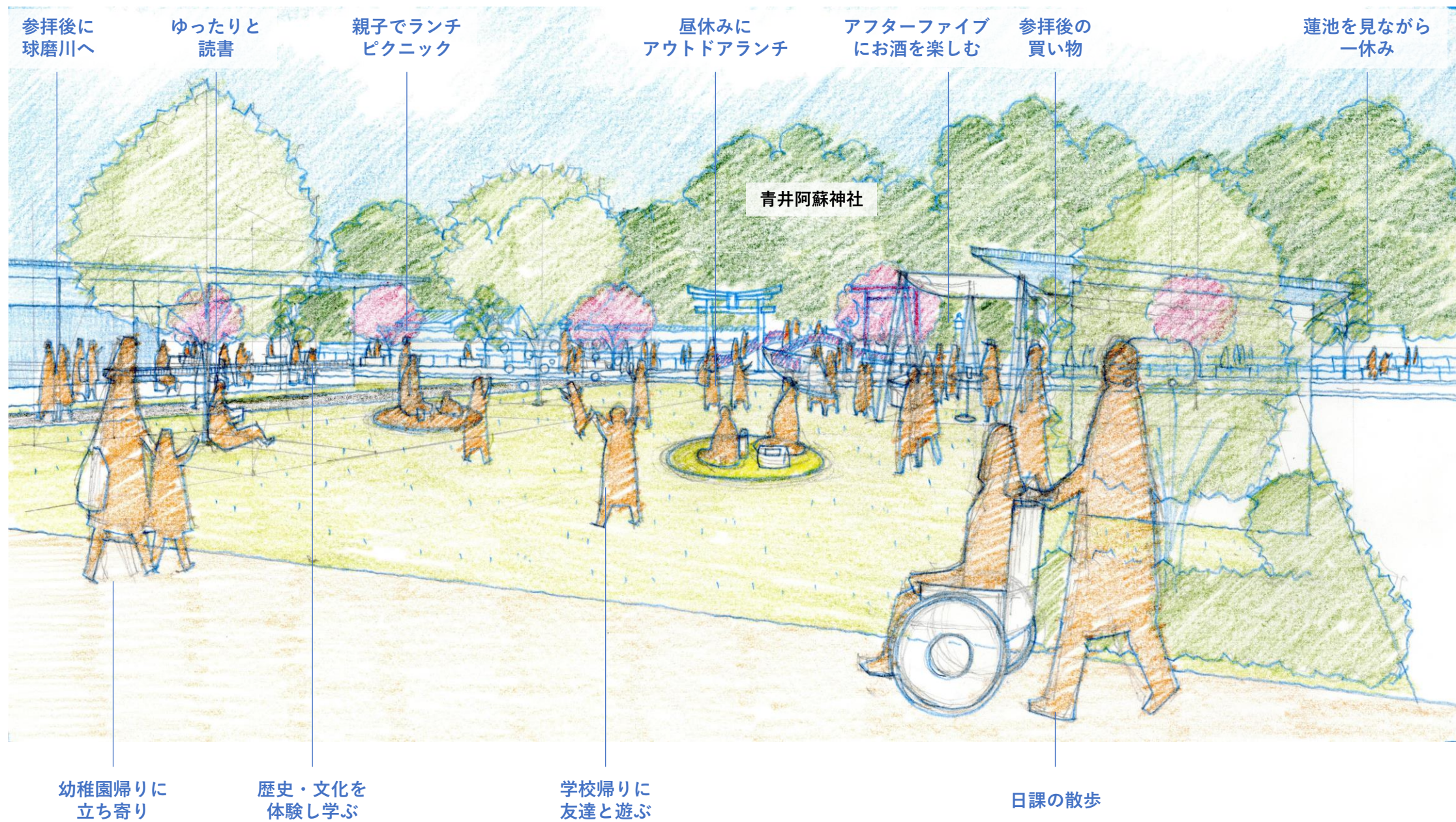
○まちづくりの3つの理念

- ①地元住民が愛し誇りを持つ“歴史・文化を際立たせる”まちづくり
- ②来訪者が歴史や暮らしの蓄積を感じ“よりまちを知りたくなる”まちづくり
- ③住民・来訪者が“共存し接点生まれる”まちづくり

○青井地区全体の道路・公園整備の考え方



[公園・広場シーンイメージ]



○地元市民・事業者の声

○青井阿蘇神社・歴史・文化

- ・保守と進取。守るだけではなく新しい風を吹き込んできた。古いというのは誰かが丁寧にしていけないと古さを醸し出せない。歴史はあるけれども斬新さがあることが大事である。
- ・人吉旅館は文化財として後世まで守っていきたい。
- ・高い建物はなるべく控え古い街並みをつくりたい。
- ・青井阿蘇神社は人吉の宝で「青井の杜」ができれば良い。
- ・地区の歴史文化を踏まえ神様前の門前町のイメージとして統一してはどうか。
- ・ゆっくりと歩きながら風情を楽しめる参道。
- ・球磨川まで含めた参拝コースを作る。
- ・おかげ横丁のイメージ。
- ・大宰府のように飲食やお土産等があると良い。
- ・昔の参勤交代時、神社から参道を通り球磨川から舟で出ていた。
- ・元々鳥居があったため、堤防を作るときに、今の鳥居になった。参勤交代で来てお祓いして、参拝に来ていた。お祭りのときも禊をしていた。
- ・金刀比羅宮の参道は曲がっているが、中央は神様の道でありそれを避けるため曲がっている。
- ・金刀比羅宮の所は昔のように御旅所にしてはどうか。
- ・昭和38年に金刀比羅宮を移してきた。石垣は最低限残さないといけない。

○暮らしと賑わいの共存

- ・青井阿蘇神社を中心とした賑わいの部分と昔からの住民が静かに暮らしてきた質の高い住宅地が共存し、補い合うのが理想。
- ・普段もそれなりに風情がある状態が良い。
- ・地区の安全性を確保した上で、併せて賑わいにつなげるなら良い。
- ・ファミリー世帯が住みたいと思うまちづくりにしてほしい。
- ・若い人が神社周辺にお店を出すようになるとよい。

○回遊性向上

- ・人吉駅からの回遊性を図る。
- ・夜の街や球磨川沿いを明るくし回遊性を図る。
- ・青井阿蘇神社の前を石畳にして車で速く走れないようにして、人がゆったり歩けるようにする。

○憩いの空間

- ・高齢者が腰をかけて会話ができる憩いの空間があると良い。
- ・若者向けの落ち着いてお茶や話ができる場所があると良い。
- ・参拝や観光に来た方が立ち寄れる場所。

○球磨川を活かす

- ・水辺を活かした空間づくり。
- ・川の近くに子供が遊べる公園があれば良い。
- ・宿泊客が夕食後、浴衣と下駄を履き川沿いを散策できると良い。
- ・ゆっくりとくつろげ、眺めがよく、せせらぎの音を聞きながら夕涼みができるような長時間滞在できるような空間があると良い。

○観光・活用

- ・楼門前に広いスペースがあれば見物客が集まり参拝者も通りやすくなる。
- ・トラック朝市などのイベントができるようなスペースがあれば良い。
- ・青井地区は観光が第一で以前以上の観光地をつくるべき。
- ・国道445号が広くなり週末戸板市のような催しができるとうい。
- ・青井阿蘇神社という国宝を活かした経済効果に繋がることが大事。
- ・青井阿蘇神社は国宝だが身近に感じるものになってほしい。
- ・新しい賑わい拠点にバスを巡回させて、国指定文化財巡りのツアーを組むとよい。
- ・青井阿蘇神社、老神神社、永国寺をセットで回れるとよい。
- ・人吉のインバウンドは、青井阿蘇神社に信仰目的で来てもらえるとよい。来てもらったついでに、神社の前に施設があれば滞在時間が増える。そうなれば泊りがけで来る。
- ・青井阿蘇神社を核にして、そこから観光の道を作っていく方がよいのではない。
- ・球磨川くだりのをメインのスタート地点をHASSENBAにして、途中青井阿蘇神社からも乗れる、料金は同じ、というモデルを作ると良いだろう。ただし、増水時は着岸できないという運用にすればよい。
- ・球磨川くだりでHASSENBAでスタートして青井で下りて参拝して再度乗船するプログラムは時間がかかりすぎてツアーには向かない。

○駐車場

- ・駐車場は全然足りない。神社周辺に車置いて、巡れるようなものがあるといい。まとまった駐車場は置いたほうがよい。100台くらいは必要。

○参考イメージ

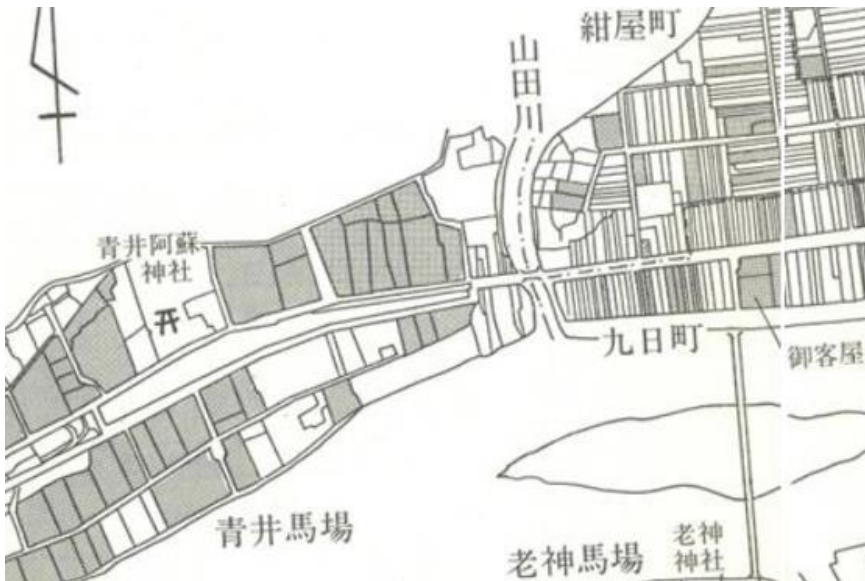
- ・かつて青井阿蘇神社付近の球磨川水際に鳥居があった



祓川の鳥居（前方は人吉橋）

出典：熊本県文化財調査報告 熊本県歴史の道調査 人吉街道

- ・青井阿蘇神社前の蓮池はかつて山田川付近までが範囲であった



[明治6年頃の地図]

出典：桑原公德編「歴史景観の復原」